

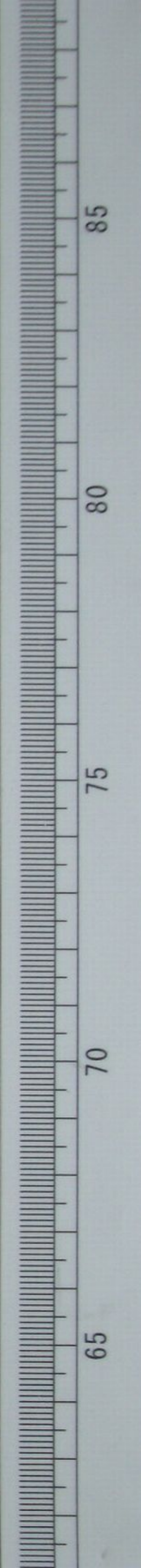
33

明治四十三年十月

多感閑語

新潟新聞不載

特別  
14  
1919  
314



門 14  
號 1919  
卷 33

門 15  
號 1880  
卷 33

昭和十六年十一月  
市島謙吉

27

の其れと同じく、金殿玉樓も皆な煙に歸し、普軍の爲に絶好の砲兵陣地として、最も酷だしく巴里の砲城軍を擧げし、之を回復せんとて突出したる佛軍の決死隊は、山に上りて奮死すといふ故蹟で、唯だ泉水や築

度木園耕育に廻つたメトロポリアン生命保險會社の總務は家屋として世界一である、五十階入道よりの總高六百六十呎であるから淺草の塔は比較にならない、此高樓に登れば維育市中日を遮る物が無い、此建築の爲には地盤下四

一痕の月影、  
て水の如く、  
を流し、  
山に上り、  
唯だ泉水や築

計四千、土臺に丈一  
れで二百萬圓以上  
を費したといふこ  
である、それで  
中腹に構付る大時  
計の時針の長さが  
十呎あつて、時間  
を示す文字が四呎  
ある、廿三、四、五、の三階が此大時計に占領されて

丸の内線



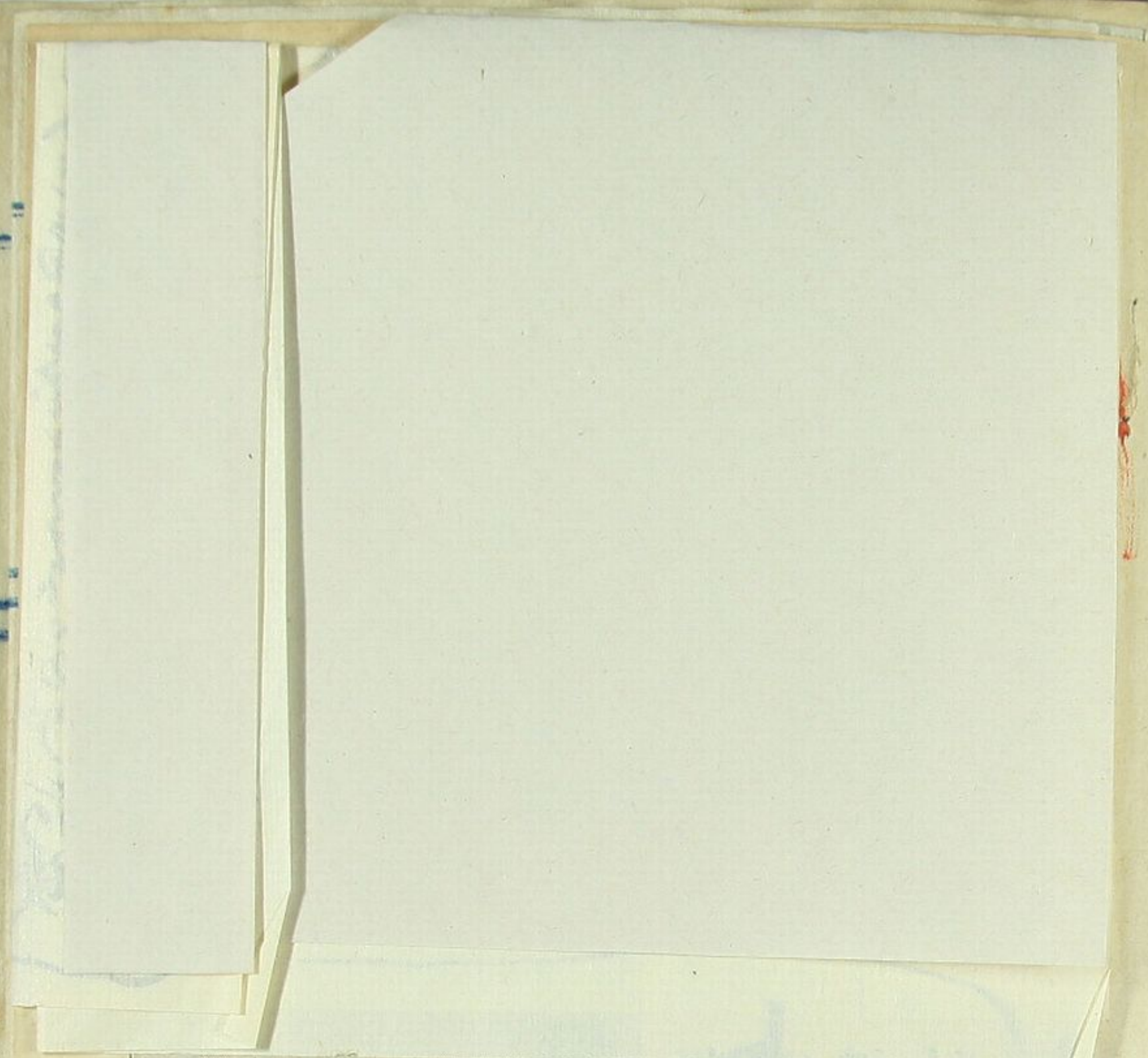
手紙の味

ハガキ文庫  
三月五日

市島謙吉氏談

書簡は普通の文章と聊か同じからずして習慣上特種の借用語を點綴しそれがため文章の趣を普通文と異にするは勿論、云は、相手に談話を爲す代りに筆に托するものなれば自然談話の精神で書かざるを得ない、去ればと云ふて談話を速記するのではないからほどよく文章の體に纏めなければならん、手紙は多くの場合に於て多忙の際に書くものである、随分使を待たせて置く場合もあるから簡潔に書かなければならん、それにしては談話を直寫することは事實行はれない、同じ事を書きあらはすにも可成簡潔の語を選ぶ必要が起つて来る、此點に於て手紙は談話の代用であるかといふに談話よりも六ヶしきものと思はざるを得ない、談話の場合には随分磊落な言葉を遣つても相手は無禮に感じぬ、却つて興を發することもあるが、それを其儘速記して見ると何となくカドが立つて荒々しく聞こえて、

無禮の感と與へ感情を傷ることになるから手紙にては書き和らげなければならん、概して敬語も多く用ゐなければならん、友人に對しても手紙の場合には敬語を要するこれは一ツは習慣から來て居る、又談話に於ては面貌のエキस्पレッションや態度が三分通りも四分通りも手傳つて談話の不充分を補ふ、例令ば語尾が弱くてもエキस्पレッションが強ければ其の語が強く相手に聞こゆる。談話が拙であつても其人の身體に備はる品藻で拙を補ふことも出来る、且つ先方の態度や調子を見てモチラよりもそれに適ふ様に臨機應變の働きが出来る、例令ば對手が快活の人ならば快活の話をする、對手が寡言の人かそれとも愛嬌の人ならば、又それ相應に語る術もある、話しに實が入れば随分長話をしても差支がない、又先方に倦怠の様子が見えれば話しの手を止めることも自在である、兎角對座談話の場合には相手の情感が顔や、態度に依りてあらはるゝものであるからこれに投ずることもこれを避くること



柳亭彦の日記の表裏裏紙の大なき様  
ありて省を様の中巻てい書を字一字

材料があること、氣附かづつたのは、未代までの策だと故重野博士が云はれたが、寔に至言で、これ讀めば清盛も重盛も、頼朝も義経も、史上の人物が廻り見るやうに眼前に躍り出て来る。而して慙くのべき貴重史料は、實に九條關白が筆まめに書いて置いた日記に過ぎない。  
極く最近の例を挙げれば、勝海舟は弱年の頃から日記を書き、つとつと續けて維新の變亂——活きるか死ぬるかといふ死生の境にも、更に廢することなさを、殊に公事は周到稠密に記載してある。  
大久保利通もまた日記癖のあつた人で、日々の出來事は最大洩らさず記してゐた。或る時内閣に會議があつて出席したが、その日の議事に必要な公文書が見當らぬ。「さあ大變」と一同は大に驚いたが、驚いてゐる丈で何うする事も出來ぬ。いくら驚いてゐても無くなつた書類は出る筈がない。ひ

書簡は普通の文章と聊か同じからずして習慣上特種の慣用語を點綴しそれがため文章の趣を普通文と異なるものは勿論、云は、對手に談話を爲す代りに筆に托するものなれば自然談話の精神で書かざるを得ない、去ればと云ふて談話を速記するのではなからば、文章の體に纏めなければならん、手紙は多くの場合に於て多忙の際に書くものである、随分使を待たせて置く場合もあるから簡潔に書かなければならん、それにしては談話を直寫することは事實行はれない、同じ事を書きあらはすにも可成簡潔の語を選ぶ必要が起つて来る、此點に於て手紙は談話の代用であるかといふに談話よりも六ヶしきものと思はざるを得ない、談話の場合には随分磊落な言葉遣つても對手は無禮に感じぬ、却つて興を發することもあるが、それを其儘速記して見ると何となくカドが立つて荒々しく聞こえて、

無禮の書き、ければ、を要する、分通、弱く、相手、備はる、や調子、働きが、をする、又それ、話をし、ば話し、の場合、もので

素公の日記を録し、是が後世に傳り世を益す例ハ挙げ切ぬるも、澤山あり、所謂諸家の記録、多くハ日誌であつて、上代のことを知んとするに、此等、依る外、無ハ、此日誌ハ朝廷のことも記したるものあり、私家の事のみを録したるものあり、今こゝハ代表的に九條家の「玉葉」を挙げ、こゝハ日誌、或ハ玉葉とも云いんてある、こゝハ確ハ日誌の玉が、現在も、古ハ日記、ハ、最古のころハ、こゝを懐、あ、源平時代の世態、ハ、あり、と、眼前、澄ん、び、くる、葉、若ハ、人、匠、の、位、を、極、め、た、九、條、蘭、白、内、容、ハ、蘭、白、が、朝、こ、ま、つ、て、日、々、見、聞、いた、こ、と、ハ、あ、る、あ、ら、う、涼、永、時、代、を、研、究、す、る、に、唯、一、の、好、材料、ハ、あ、り、水、戸、ハ、大、日、本、史、を、編、纂、す、る、に、方、り、何、故、こゝろ、よ、う、ハ、材料、の、あ、る、つ、い、ハ、氣、附、か、る、つ、い、ハ、**素公**、**が、宣、美**

失策だ、を讀め、面、如、貴、いた、日、記、を、書

とり大久保公は悠然として「然らば致し方が御座らぬ」と、使を馳せて私邸から日記を取り寄せしめた。日記の中には細々とその書類の文言が寫してあつた。

●こんな次第で、大人物程益々日記が必要である。社會の上位に立つて、國政を料理してゐるやうな人は、その關する事柄が重大であるから、その真相を飾らす僞らず記して置いたならば、獨り自己一身の爲めのみならず、國家の爲め、人類の爲めにも幸福である。

●此の意味から、私は多方面に世間へ出てゐる人が、若し日記をつけて呉れたならば、何れだけ後世を益するであらうかと思ふ。然るに多方面に活動してゐる人は、繁劇であるから自づと日記などを記けない。併し慫う云ふ人が日記を記け出したら、それこそ將來の珍品絶好の史料となるだらう。

○天正慶長の頃、曲直瀬道三といふ有名なお醫者があつた。今去人は青山博士、佐藤博士、去つた方々な大家、桃山時代の天子、將軍、武將——豪傑——去つた豪傑は悉くその手に懸つたから、世間の人が誰しも翅

望景仰してゐる人々の事は、曲直瀬に取つては鏡に懸けて見るやうだ。

●幸に「醫學天正記」と、假りに名づくる此の人の日記が残つてゐるが、それは所々、今の病床日記の簡略なやうなもので、誰々を診た處、何々の病氣であるから、何々の藥を投じたと書いてあるに過ぎない。併しこれ丈でも非常な参考になり、時の豪傑の面目が躍々として紙上に現はれる。當非に武骨な人が花柳病に罹つてゐたり、鬼をも挫ぐ許りの豪傑が、病氣の爲めに酷く弱り込んでゐる狀況が有々と見える。若し醫案に止まらず、更に一步を進めて、狀貌氣風等の印象を少しでも書いて置いたならば、何れ丈後世を益したかも知れない。

●「無きは有るに優る」で、假令僅か許りでも、書き残して置くと、それがその人の爲めにもなり、又後世の爲めにもなる。記憶といふものは當にならぬもので、よしその人が確實と保證しても、記憶には變遷があり、間違つた記憶が筋を引いて、間違を事實と確信して丁

何れか

ふことがある。或る歴史家は曾て嘆息して云つた「現存してゐる人に就いて、當時の狀況を悉く聞いてその通り書いたが、後で出て來た書類を見ると、何れも是もその言の反對に出てゐた。記憶は信すべからざるものである」と。至言である。こゝに於いてか、益々日記の必要も感ずる。

●去つてゐる人々、大阪に兼葎堂といふ有名な好事家があつた。身は八藝に通ずと云ふ風で、實際が極めて廣く、猫も杓手も皆知つてゐた。此の人の日記は極く簡單なもので、僅かにその訪問者の名前が書いてある位だが、それでも大に参考になる。たゞ名前丈であるが、その名前を見れば實際の範圍、嗜好の廣狭なども窺はれる。若し最う一步を進めて、初對面の様子などを記して置いたら、何んなに興味が深く、且つ参考に成つたらう。又蜀山人

○太田南畝と云へば知らぬ者もあるかも知れぬ。蜀山人と云へば誰も知つてゐる。此の人は豪放磊落、狂歌を作つて洒落の中に世を送つたと思はれるが、併

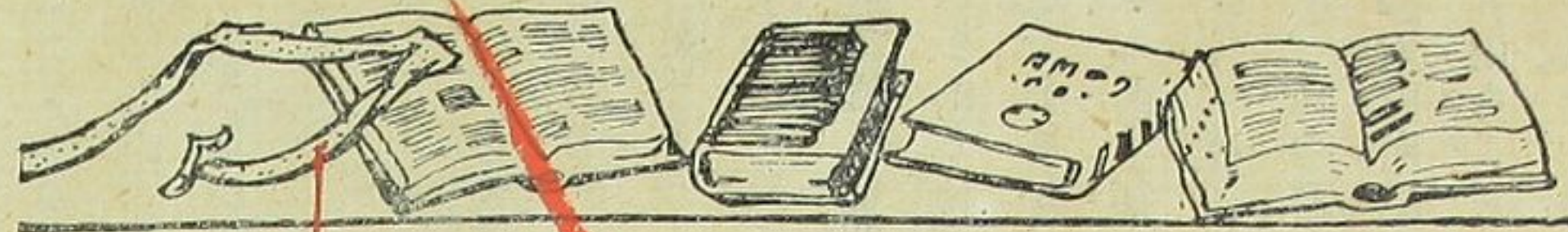
大久保公の日記

し日記を見ると中々用意の周到な人である。私が近來見て感服したのは、蜀山人が公務を帯びて長崎に滞在中、飛脚に托して一週に二三回宛その留守宅へ送つた手紙である。一定の紙へ一定の式で書いて、纏めれば日記になるやうになつてゐるから、他日の保存に適するやうに記したものに相違ない。之を讀むと、當時の長崎の狀況が有々と眼前に現はれる。

●柳亭種彦といふ非常に謹嚴な性格を有つてゐた。その日記を見ると、表紙裏に大きな「様」の字が書いてある。それは日記の中の人名の下に一々様を付けてないから、表紙裏の大字で省略した分を代表させることゝしたのである。些細なことだが人格がほの見えて面白くない。

●兎に角、慫う云ふ譯で、古人の書き残した日記が、後來利益となり、参考となる點から考へると、人は誰しも以上の觀念を以て日記をつけることが必要である。

がらあて者作戯



# 現今世界に於ける帝國主義の趨勢

(四四)

衆議院議員 林 毅 陸

## 昔の帝國主義と今の帝國主義

歐羅巴の評論家は、屢々、十九世紀は國民主義の時代にして、二十世紀は帝國主義の時代なりと云ふ。いかにも、十九世紀の末葉より二十世紀へかけ、帝國主義が世界の主流を來せることは事實である。しかし、帝國主義がこの世に存在せるは昔よりであつて、決して今日に始まれるに非ず。唯昔の帝國主義と今日の帝國主義との間には、性質に於いて多少異なる所がある。昔の帝國主義は、アレキサンダー、シーザー、近くはナポレオンの帝國主義であつて、武力的征服の手段により一大帝國を打立てんとするもの、而してその動機とする所は一英雄の功名心を満足せしむるにある。しかし、今日の帝國主義の動機とする所は全然經濟的である。而して同じく征服するといふ言葉を用ゆるにしても、その意味は軍隊の征服とは異なり、要するに對外經濟的發展上の利權擴張主義とでもいふべき性質のものである。故に、本來經濟的の性質の上に政治的色彩を加味したるもので、政治的色彩が本來の性質ではないのである。

大正十二年一月廿三日 所載



# 我社主催の同紋會

(二月十二日紅葉館にて開會)

## △趣味ある社交會

我社の主催に係る同紋會第一回、木瓜紋の同紋者會は一月十二日の日曜日に芝公園内紅葉館に於て開催された。

定紋を家族の徽章とするは世界になき日本の特色である。時勢の變遷と共に紋の事は今日餘り注意されず、堂々たる紋付羽織を着て居る人でも、殆んど無心無意味に着流して、同紋者に對しても一向注意を拂はずにゐるやうであるが、其紋の世原を辿つて探つて見ると、頗る面白い因縁があつて、歴史にも、國民性にも又己が家系にも少なからざる關係があることを發見する。

此に於て我社は主催となつて同紋會といふ一の社交會を發起した。即或選定された紋を共通に定紋として居る同紋者が、位地、職業、身分等の畛域を撤して

互に一堂に會し、自家の紋に就て研究したる話を聴き、又各自互に同紋の由來に就て趣味あり情味ある談話を交換するのである。

社會の傾向が追々競争的となるにつれ各種の社交會も自然生活や職業に關係して、如何にも餘裕のない時勢の壓迫を感じつつある今日、此同紋會の如きは誠に紅塵中の閑天地といはねばならぬ。此點から考へても同紋會の發起は決して無用でないと思ふのである。

## △第一回は木瓜紋

さて第一回は何の紋を選定すべきかといふ事に就て種々研究をして見た先づ現代の名士へ照會狀を發して其定紋如何を問ふて見たが、其回答に接した諸名士の紋の中で同紋の最も多數であつたのが木瓜紋であつた。木瓜黨は他の紋に比較

して大多數を占めてゐた。恰も好し、我増田社長も木瓜紋である。依て紋章學の専門家に就て調査して見ると矢張木瓜紋が一番多いやうだ。そこで第一回は木瓜紋と選定した次第である。

同紋會の會場としては、西洋料理は甚だ相應はしくないので、紅葉館を會場として選定した。又出席者は洋服では面白くない。依て必ず紋付羽織着用の事と規定した。日は一月十二日の日曜日を卜し、時刻は午後一時より夜にかけて半日の清興を樂むことにした。

## △休憩室の光景

紅葉館では大廣間の上下を以て會場に充て、下を談話室とし、二階を食堂とした。定刻より三々五々來集せる會員は皆就れも木瓜の紋付羽織袴の打扮である。休憩室では紋章の話の掲載された「實業之日本」第二號が配られる。生田目氏の書かれた「家紋の由來」が提供される、一百餘名の名士より回答された趣味ある名士の紋のハガキが回覧される。それに同紋會の擧を賛して森永菓子商店より此會へ寄贈した木瓜紋の菓子配布される



紅葉館の女までが木瓜の紋付で周旋する

△同紋の名士と名士

來會者諸君の中には時計王の服部金太郎氏があるかと思へば、早稻田大學理事の市島謙吉氏がある。縫目なしの蚊帳で有名な伴傳兵衛氏があるかと思へば、文學博士の吉田東伍氏が見える。工學博士の阪田貞一氏と鹽業家の山田鎗之助氏と話が始まる。三輪田高等女學校教頭の三輪田元道氏と昌平銀行頭取吉田三郎右衛門氏と商業銀行取締役増田金四郎氏とが火鉢を圍つてゐる。遠きは新潟縣、近くも平塚、千葉邊からわざわざ、此日の會に出席された篤志家もあつた。萬朝報の服部圭子女史は萬縁中の一點紅であつた。

△愈々開會

午後二時過開會を報じて一同着席、増田社長先づ壇に登つて開會の挨拶を陳べた。新年早々御來會を辱じけなう致しましたるは、發起者たる我實業之日本社同人の最も光榮として深く感謝致す所であります。元來衣服に紋を着けて居る

と云ふので第一回を木瓜の紋にしたと云ふ譯であります。平素職業或は其他社會上に於て活動する所の方面は、銘々違つて居りますが而も同じ木瓜の紋、と申しても其中には二三十も種類があるのでありますけれども、併し其據つて來る所は一つであるに相違ない。を定紋とせらるゝ有力なる各位と一堂に會して、互に胸襟を開いて種々なる御話を伺ひ又此順序書に書いてあるやうな事を順次致しまして、此春の一日をゆつくり御暮しを願ふことには必らずしも無用な事ではあるまい。斯様に思つて今日此會を開いた次第であります。

△諸名士の演説

社長の挨拶が終わると左の順序に依つて講演があつた。

- 一、紋章に關する余の趣味 早稻田大學理事 市島 謙吉
  - 一、同紋會に就て 三輪田高等女學校教頭 三輪田 元道
  - 一、定紋の由来 早稻田大學教授 吉田 東伍
  - 一、木瓜紋の話 生田目 經德
- (速記は順次別に掲載する本號には市島氏の話を掲載せり)

と云ふことは、世界中日本人より外にはないやうであります。而も其紋を同じうして居ると云ふことは、何か因縁のあることで、随分之れは研究して見たら趣味の多いことであらう。袖振合ふも多少の縁と云ふ位であるから、紋を同じうして居ると云ふには最も深い因縁があると思つて居ります。そこで此同紋の人が一堂に相會して話をすると云ふことは、誠に趣味ある交際であるまいかと云ふ所から、實は斯様なことを思立つたのであります。

然らば第一回には何の紋にしたら宜からうかといつて種々研究もして見ました。私自身が木瓜の紋であるが爲に、兎角外を歩くと木瓜の紋付きを着て居る人が誠に多いやうに見える。質屋なども木瓜の紋は高く取つて呉れると云ふことを始終聞いて居る。さうして見ると之は日本に於て一番多い紋かも知らんと言つても夫れならどなたが其同紋かと言つて御名前を指すことは誠にむづかしい。實業之日本には其趣意を發表して來會を勧めたが、實は大海へ針を一本投じたやうな感がある。さう云ふやうな譯で何處にどんな御方が居られるか分らぬと云ふ譯である。そこで一面に於て三越呉服店白木屋呉服店などへも御依頼して、木瓜紋の名士を調べて貰つたり、又電話で心當りを探したり、或は往復葉書を出して問合せて見たりましたが、結局矢張り木瓜の紋が一番多いやうでありました。

特に講演を請ふた此等諸名士も亦皆木瓜の同紋者である。演説終るや、直に席を二階に移し、一同配膳に就き、それより講演界の立者細川風谷氏は木瓜紋に因り講演の織田大炊信勝の痛痛快淋漓大喝采を博し、次て説教節の名手若松若太夫の蓮生坊は満場を感動せしめ、それが濟むと會員は一々起つて姓名と職業を名乗り、それから福引、それから踊と二分に清興を罄して十時頃散會したは近來になさ趣味ある會合であつた。當日來會諸君の氏名左の如し(此日招待したる新聞記者諸君の中にも木瓜紋の人が少なくなかつた)

出席者氏名

- (いろは順)
- 早稻田大學理事 市島 謙吉
  - 高田新聞社理事 伊藤 泰藏
  - 都新聞記者 岩橋 信二郎
  - 時事新報記者 服部 金太郎
  - 時計及貴金屬商 岩橋 信二郎
  - 萬朝報記者 服部 圭子
  - 表毛布敷物商 伴 傳兵衛
  - 商業銀行取締役 堀田 金四郎
  - 太物金中裏地問屋 堀田 與兵衛

市島謙吉君は私と同縣同紋の誼で今日御出になつて居られますが、先年大隈伯が越後へ旅行せられた時、私の郷里高田で歓迎會があつて市島君も出られた。折しも夏の事であるから、皆樓下へ紹の羽織を脱いで置いた。處が其羽織を着る時にサア市島君の羽織であるか、自分の羽織であるか、誰の羽織であるか、更に分らない。皆同じ木瓜の紋である。裕てあれば裏で分るが、紹の羽織であるから分らない。漸く羽織の紐て之を物色して一同大笑をしたことがありました。又長岡の木村某と云ふ人が 石油事業をやつて俄に金持になつた。所が其人はまだ紋の付いた羽織を持つて居らぬ。金が出來たから早速呉服屋へ行つて、一つ紋付羽織を拵へて呉れと注文をした。御紋は何ていいますか。それはよく分らぬが近頃はどうな紋が流行るか、左様でございますな、木瓜の紋が流行ります、さうか、それでは木瓜にして呉れ。と云ふので、直に木瓜の紋を付けたと云ふ話であります。して見ると如何に此木瓜の紋が多いかと云ふことは想像される

- 保科 傳吉
- 大原 祥一
- 岡野 雷吉
- 小川 竹次郎
- 奥居 彦松
- 渡邊 治太郎
- 鹿住 衛平
- 吉田 東伍
- 吉田 二郎右衛門
- 武田 小太郎
- 武井 光尊
- 高久 邦三郎
- 生田目 經德
- 中山 沖右衛門
- 宗像 秀藏
- 上野 精一
- 山口 龍夫
- 山田 鎗之助
- 山内 元太郎
- 藤崎 正太郎
- 高力 良次
- 近藤 春夫
- 新井 新一郎
- 佐藤 泰一
- 佐田 貞一
- 佐々木 貞一
- 三輪田 元道
- 廣瀨 次郎
- 廣田 誠一郎
- 廣田 誠一郎
- 廣田 誠一郎
- 久田 宗作
- 向甲府の金子東一氏は特に書面を以て會員の列に入らんと熱望を披瀝されたり

當日福引の重なるもの二三を左に掲ぐ

- △本日同教會……ステッキ二本……(ステッキ)
- △本日の出席者……團扇と秤……(内輪ばかり)
- △本日の好天氣……紙籠……(神の加護)
- △議會の運命……貝三つ……(解散)

- △政治家の骨格……(桂のお株)
- △桂公の性格判別……(押しが強い)
- △支那の現状……(日に薄くなる)
- △憲政擁護會……(開族を燒きすまて吹け)
- △昨今の經濟界……(神經過敏)
- △米價と貧民……(涙が出る)

第拾六卷第參號 (三四)

# 紋章に關する余の趣味

早稲田大學理事 市島謙吉

## △未曾有の珍らしき會

諸君、此會の催しに就ては第一先づ同教會と云ふ名が私の氣に入つた。一體同の字を付ける會は種々ある。或は同好會同攻會、同人會、同窓會、同郷會、同志會、同盟會、同族會、同宗會、同門會などといつて、同の字の付く會は随分澤山あるが、同教會と云ふのは餘り聞かない。恐らく實業之日本社の此計畫が始めにかも知れぬと思ふ位である。同教會は斯くめづらしいのみならず、又意味が廣いと云ふ點から見て實に面白い。同郷會同窓會、同志會と云ふものは、方面や範

圍の限られたものである。同教となると、殆んど源流を同じうするので、事に關ると其祖先が同じかも知れぬ。或は君臣などの關係から考へると同じ君を戴いたと云ふやうな古い因縁があつたかも知れぬ、頗る歴史的であつて、其幅は殆んどどれ程あるか分らぬと云ふ譯で、天下同じ教章なるものは皆會員たることが出来る。銘々此うやつて世に立つて居ると、一向お互に知らぬ者のみであるが、それが同教の因により一堂に會し得ると云ふのであるから大層興味がある。一口にいふと見ず識らずの同族者が此所に會すると云ふ機會を得る譯である。是は此催し

## △天下に多い木瓜紋

さて主催たる實業之日本社がなぜ木瓜を最初に選んだかと云ふことに就てはどういふ理由があるかと思つてゐた、今増田君から段々御説明がありました。私も矢張りそんな事であらうと思つたのである。先づ第一に木瓜を選んだのは然るべき事と思ふ。是は非常に澤山ある紋である。増田君の述べられた通り一口にいふと之は俗に一質屋に極めて受けの宜い紋」と云ふことになつて居る、質屋の目で見ると種々なる紋付羽織の中でも融通の利かない奴と頗る融通の利く奴がある。此木瓜の紋、質屋に至極歓迎するとは古くからいつて居る、即潰しが利く、それ程廣く行はれた紋であると云ふことが言へる。紋帳を見ても木瓜の紋は仲々多い。尤も變體が澤山ある。色々變つては居るが、此瓜から起つた紋は殆んど幾十種に

涉つて、此同教者は天下に溢れて居る位に多いと申して宜しいと思ひます。次に此紋を増田社長が付けて居られる。面白い、此木瓜はどうも實業之日本式である。只其商賣の行道や何かに依つては、直ちに此實業之日本風には參りませぬまいが、兎に角同じ紋であつて、實業之日本社に何となくあやかるといふ心持がする。兎に角第一回として斯様な融通の利く紋を選ばれたと云ふことも亦興味のあることであらう。

## △亡友の紋に關する逸話

此事に付いて可笑しい話がある。私の亡友に山田一郎と云ふ人がある、其人の記念日が近く二三ヶ月の内に迫つたと云ふので、其人の油繪を門人が作つて、私に見て呉れと言つた。昨日持つて来た。見ると大體よく出来て居るので特別故障の付け所もない譯であるが、さて不圖見ると紋が違つて居る。一體此山田一郎と云ふ人は「天下の記者」(記者曰く本社より發行)といふ傳記まで出て居る位で、大學出の秀才と言はれた男である。非常に物に格はない人で、殆んど自分の紋付羽織を持つて居らぬ。止むを得ない場合には甲乙の友達から紋付を借りて行くのである。隨つて其持つてありました寫眞も、誰か人の羽織を借りて着た時の寫眞である。其寫眞を本として描いた油繪の下圖であるから

無論通つた紋が付いて居る筈だ、そこで大抵の場合ならそんなことは氣がつかないのであるが、此同教會が明日開かれると云ふ前日のことであつたので、幾らか紋の事が頭にあつたから氣が付いて見ると、それは山田君の紋ではない、そこでよい處へ氣が付いたと思ひ之れは改めなければいかんと云ふことを指圖した次第である。之れも必竟同教會の御蔭で、斯様なことに氣が付いたのである。

## △紋の起原

さて一體紋はどう云ふ所から起つて来たかと云ふに、起原は極めて單純なもので、必要の上から起つて来たものが多い。紋となつたのはさう古くはないが、物を識別する爲めに章となつて居るものは古くからあつた。私は源平頃からでもあらうかと思つたが、まだ夫れより古いと云ふ説もある。而して此章は何の爲に起つたかといふに必要から起つて来たに違ひない。例へば戦争をする場合に當つて、甲の軍隊の屯して居る所、乙の軍隊の屯して居る所、それ々率ある人が違へば隨つてそこにある帳幕等にも何等か違つた章を付けなければならぬ。是は便宜上止むを得ぬ。旗であれ、差物であれ、それ々章を付けて他と識別する必要がある

ので、追々と工風をして色々な章を付けるやうになつたに違ひない。勿論斯様な場合に當つて餘り複雑なる章を付けることはなかつたらうと思ふ。遠くから望んでつらりと分るやうなものではなければならぬ、今日御互が付けて居る如き複雑なものには遠くから望んだ所で仲々分るものではない。故に始めは誠に單純なものであつたのが、夫れが追々と複雑になつて来たのであらう。兎に角先づ始めはそんなものであつたらうと思ふ。今の皇室の御付けになつて居る菊の御紋章、其起原に就ては歴史家側から色々御話もありませうが、兎に角餘りむづかしい意味から起つたものであるまいと思はれる。尤も其時分支那から輸入されて来た呉服などの類に色々な裝飾の模様が付いて居た御互ひ付けて居ります所の木瓜の如き色々變化したのも、呉服の表に色々ある譯である。乃ち一は章に用ゐる、一は裝飾に用ゐたものが互ひ互ひに拮み合つて、紋章の起原を爲したものであらうかと思ふ。そうして始めは旗の章若くは幕の章と云ふやうなものが、遂には毎日常用して居る所の衣類迄に付ける。若く

は其持つて居る總べての調度に迄付ける  
と云ふことに追々なつて來た者と思ふ。

### △三百諸侯の紋

我日本の如き封建制度を経て來た國柄  
に於てはどうしても紋章は必要であつた  
に違ひない、先づ三百の諸侯にしてはそ  
れ／＼他の諸侯と區別をする必要があつ  
た。尤も差物とか鎧とかには何等かの工  
風があつたに違ひはないが、その外に何  
かはつきりと分るものが必要であつたの  
である、無論三百の諸侯が必ず三百種の  
紋を付けたと云ふ譯ではないが、兎に角  
紋が其時代に必要であつたらうと思ふ。  
三百の諸侯が江戸へ押込んで來ると云ふ  
時にも、又其屋敷にしても又登城でもす  
る時でも紋でちやんと分る。見付の番人  
は紋を見て之れは何十萬石の殿様、何萬  
石の殿様、と云ふことを心得て夫れに對  
して相當の敬禮をしなければならぬ。故  
に見付番所の役人などと云ふ者は一種の  
紋章學を心得て居らないと勤まらなかつ  
たやうな風であつたと思ふ。今こそは紋  
の名などは殆んど指を屈するほどしか御  
互は知ては居ないが、或る時代には實に

一の紋章學と云ふ程のものがあつたやう  
に思ふ。私の幼時に私の郷里（越後新發  
田）へ伯龍と云ふ軍談師が來た。之れが  
頗る上手な軍談師であつて、今日から考  
へて見ると實に驚くべきものであつた。  
殆んど二日三日位に涉つて大名行列の講  
談をやる、一日に三時間も續けてやつた  
が夫れが殆んど行列ばかり、それを三日  
も續けて人を倦ませないやうにやつたと  
云ふは實に驚くべき技術であるが、さて  
其行列には何が専ら出るかと云ふと先づ  
紋所の話と云ふものが極めて多分を占め  
て居たのである。もうあらゆる紋を並べ  
立てる。實に能辯なもので、是等は一種  
の専門を爲さなければ一寸遣り切れぬ位  
なことなのであつた。それ程に昔は紋章  
に力を入れた時代があつたのです。

### △紋は多く植物性

次に日本の紋章を見ると多くは植物性  
のものである。之れはどう云ふ原因であ  
るか學者の側には色々御説もありませ  
う、西洋人で日本のことを久しく研究し  
たチャンバレンといふ人の説に日本人  
の紋は總べて植物性のものである處から

考へると、日本人は昔は植物ばかり食  
ふた人種であつたらうと云ふことを申し  
て居る。之れは恐らくこじつけてあらう  
と思ふが、兎に角植物性のものである。  
紋章の起原は支那から來たものであらう  
が、一體日本人は動物的ではなく寧ろ植  
物的である。其事に付いて可笑しい話が  
ある。近頃私の關係して居る早稻田大學  
で、何か大學の徽章を一つ定めやうと云  
ふので、私が擔當して色々工風して見た。  
それには甚だ窮したが詰り早稲田の早の  
字を段々調べて見ると、あれは日が木の  
上に昇つて居る形と云ふことになる。「日」  
の輪廓を大きく書いて真中に一點を打つ  
て「十」を下を飾ると其恰好は丁度橘の  
やうになつて、花が兩方にあるやうにな  
つた。其を總長大隈伯に見せて相談した  
所が伯の言はれるには、一體日本人は紋  
でも何でも植物的でない。どうも植  
物は元氣がない。之れに反して西洋では  
或はライオン（獅子）或はイーグル（鷲）と  
云ふやうなものを付けて居る。斯様な血  
性のあるものを一つ取る方が元氣を示し  
て宜いではないかと言はれた。之も一説  
であるが、未だ何とも決定しない。

### △外人が眞似た紋

さういふ風であるから今後或は之に又  
外國趣味が加はらぬとも限らぬ。外國人  
なども往々日本の紋を愛する人も出て來  
る。之れに付て可笑しい話がある。或る  
日本最負の外國人が、自分も一つ紋を付  
けて見たいと云ふので種々工風をした。  
出來たといつて着用したのを見ると丁度  
フロックコートの真中に眞白の紋を付けて  
ある。よく見ますると之れは奇抜だ。洋服  
だから日本の如く染める譯には行かぬ。  
さればと云つて貼付紋も妙でない。そこ  
で考へ付いたのは、紋に相當する所をす  
つかり切抜いてしまつた。さうすると下  
に白いシャツを着て居るから、上から見  
ると一寸紋のやうに見える。随分奇抜な  
意匠である。兎に角紋と云ふものは日本  
ばかりではない。外國にも盛んに有るが、  
用ひ方が甚だ違ふ。日本の如く衣類に着  
けて居ることは餘り無い。

### △葵の紋と大隈伯

前述の如く紋は必要の上から起つたが  
之れで人と人とを區別すると云ふやうな  
ことは無論古い時代の事で、段々裝飾に

傾き、今日は裝飾の方が先づ十の中八九  
を占めて居る。裝飾の問題は、趣味の間  
題である。徳川將軍家の時代には、葵の  
紋は非常に尊い紋であつた。恰も今日菊  
桐の御紋が非常に尊いと同じ事、葵  
の紋を付けた旗とか長持と云ふやうなも  
のが通ると敬禮をして土下坐をさせられ  
たやうな時代があつた。さう云ふ風であ  
つたから此葵の紋を頂戴することは非  
常な光榮と思つて來た。例へば葵の紋を  
鏤めた手箱を頂戴するとか、若くは杯に  
葵の紋のあるものを頂戴すると、千兩萬  
兩の金を貰つたよりも尙ほ有難いとした  
ものである。其風が段々近世迄傳はつて  
來て紋服と云ふものを下し興へる風習が  
起つて來た。即功勞ある者に向つて紋服  
を授ける。之れは一時の方便として金を  
授けるよりも、安上りである云ふやう  
な事もあつたらうが兎に角紋服を貰うと  
いふことは非常な光榮とした者である。  
然るに時勢の變遷と共に其葵の紋も御  
維新の時分には一向價値がないものにな  
つて了つた。そこで古着屋へは葵の紋付  
の着物が夥しく出た。是れはまさか葵の  
紋を自分の家紋とする譯にもいかず、又

無暗に葵紋を着て歩く譯にもいかぬか  
ら、拜領物でも何でもドシ／＼古着屋へ  
持つて行つたものと見える。大隈伯が先  
年大丸呉服店へ行かれたときにこんな話  
をせられた。伯が參議になられた時は葵  
の紋付が盛に古着屋へ出た頃であつた。  
伯は參議になつたが、書生上りだから家  
にはまだ着物なども十分に備はつて居ら  
ぬ。そこで古着屋へ行つて盛んに葵の紋  
章の付いた着物を買込んで來た。全く二  
足三文であつた。なぜ葵の紋を伯が選ん  
だかと云ふと、何しろ徳川の勢力で造つ  
た着物であるから、地質が極めて良い。  
紋は葵でも何でも構はぬ。質が良いと云  
ふので大いに買込んだ。それで寝衣も葵  
の紋、平生着る葵の紋、有らゆる衣服に  
葵の紋が付けて居た。その爲に大隈家の  
紋は葵だと思つた人もあつた位。そんな  
風に葵の紋付が多く下げられた。  
今日に於ても紋付を授けると云ふ習慣  
を持續して居る處がある。之は一の美風  
である。大阪の舊い商店、例へば山口銀  
行の如き古風な舊格を守つて居る家庭に  
於ては、或る機會に、總店員へ山口家の  
紋章の付いて居る揃ひの時服を授けるこ

とになつて居る。それが大變に善い事て何だか家庭的になつて、餘程親しい味がある云ふとを承はつた。

### △紋章が工藝に及關係

さて此紋章が裝飾になつてから工藝に對する紋の關係は實に非常なものであると思ふ。既に裝飾物になつた上は、有らゆる物に紋が付けられたやうである。即封建時代の方から言ふと、例へば刀劍類に紋章を鏤めたことは勿論、目貫の如きは必らず幾分かは紋を入れると云ふ時代もあつた。それから煙管とか、或は人の乗る駕籠のやうなものとか、座敷の裝飾になつて居る手箱とか、甲冑の腹の方面の裝飾とか、或は女の化粧道具の類とか、夫れから些々たるものに至つては、風呂敷のやうな類或は膝突さとか云ふやうな類に至るまで皆紋を付けた。單に付けるのみならず或は金糸等を以てそれを繡んで發達した。それで恐らく或る時代の裝飾の中から、此紋章を除いたならば、殆んど寂寥の觀があるといつても過言でない。兎にも角にも紋章と云ふものは裝飾の問題として、意匠の問題として、頗る

研究を要するものであると思ふ。

### △田沼時代のハイラカ紋

趣味裝飾の時代に入つて來てからは、紋の源流とは非常に飛離れて仕舞つて色々な工夫を凝して洒落れた紋を付けることが始まつた。或は月の下に時鳥が居るとか云ふ紋、或は簪に封じ文が挟まつて居るやうな紋章、是等は決して古いものではない。趣味家が意匠したものに違ひない。紋章に付て時代が大變よく分ることがある。先頃私が早稲川大學で和蘭書の會を開きました時に、或る人の秘藏に係る紋帳が其時出て來た。其中に頗る面白い紋がある。それはどんなものであるかと云ふと、即ち和蘭人の書いた紋である。之れが幾十を以て數へる程澤山ある。どんな風なものかと云ふと、例へば小林なら小林を羅馬字に書て、それが又自然に模様をなすやうな恰好に書いてある。それを研究して見ますと田沼時代に起つたものであつた。田沼(意次)は非常にハイカラな人で、大分西洋の新しいものを取込んだ時代である。それが爲に田沼は大層悪く言はれて居るが、兎に角文明の關係からして田沼と云ふ人は仲々の働き

をした人である。其時代に和蘭紋帳と云ふものが非常に流行り出した。餘り澤山紋帳に載て居るから私は最初之れは好加減に工夫して只載せたものではあるまいかと考へた。所て段々調べて見ると決してそう云ふ譯ではない。一時かういふことが大に起つたものであることが分る。

### △余は紋の保存論者也

要するに私の考へはどうしても日本人の紋を保存したい。一概に古いものを保存したいと古風を主張する譯ではないが……思ふに日本の衣服も必らず或時代までは滅びないで存在するであらう。日本の禮服が存在する限りは日本の紋章は、裝飾の爲にも、源流を幾分示す爲にも必要であると思ふ。一體禮法と云ふものは何處の國でも由來のある歴史のものである。どうしても此日本の禮服は保存し、且折角一時發達して銘々の家の章となつた此紋章も同時に棄て、はならぬと思ふ。老人連はあれは清和源氏の嫡流であるとか何とか云ふことを言つて居る。それは事實どうだか分らぬにした所で自分の祖先の紋があく迄傳はつて居ると云ふことを歴史的に自分等の誇りとするのは面白いことである。(拍手喝采)

日本圖書新報の發刊を祝し  
其の健康なる發展を祈る。

衆議院書記官長

林田龜太郎

日本圖書新報の健全なる發  
達を祈る。

理學博士 丘 淺次郎

日本圖書新報の發刊を祝し  
健全なる發達を望む。

法學博士 浮田 和民

ルジウトルコに於ける。この  
嫌ひ迫害を加へたものである。  
いよ／＼たまたまなくつたから  
モ、このいふ處に大會議を開いて遠征軍

萬圓の廣告料を拂はなければならぬといふ状態である。處で其の割合に讀者が得られないといふ日本の状態であるから、随つて書物の價が高くなる傾向がある。そののみならず、多くの廣告費を要するといふ點から、定價の易い書物などは、廣告費がかげられない爲めに、その出版が極めて困難である。それだから、廣告費のかげられない爲めに、單篇の小冊子の如き、その内容が如何に有益なものでも、遂に出版の出来ないなどいふ場合もある。今後新聞の廣告代が益々高くなる他日を考へると、書物の出版といふものは益々困難に陥るといふ傾向があるが、

もあつた中に、下のやうなものもある●佛蘭西のペテット、デョーナルの遣り方は面白い。盛大になればなる程小さくなる。言換れば、發行高が大きくなればなる程益々紙面紙数を小さくする記事を引き締つた物にして行くのである。斯うなると、一字一行も忽にする事が出来なくなるし、また一字一行も大に注意を惹く譯になる。斯くの如くなれば、これの新聞批評となる。恐る可き權威を以つて讀者に迫る譯になるのである。●君達は知らぬかも知ぬが、昔『出版月報』といふ圖書評論の雑誌があつた。盛んに嚴正な批評の筆を振つた雑誌であつた。嚴正公平に新聞と只管肝膽を碎き居る處

と只管肝膽を碎き居る處

日本圖書新報の創刊は極めて時機に適せるもの、余はその健全なる發達を望む。

陸軍中央幼年學校教授 羽田 清八

日本圖書新報の爲めに 市嶋謙吉

(市嶋先生が、早稻田大學の圖書館長として、此の方面に高い識見をもたれたることは、此處で語るには、餘りに有名である。御多忙な時間を割愛されて、始めて談話の筆記さいふ事をして見る記者の爲めに、懇々と談られたのが、左の一篇である。吾が社は、これによつて、發明する所の多きを加へる事が出来た。讀者諸君も、自身の爲めまた廣く文明の爲めに、此の御高見に對して、深い反省と一段の御助勢をして下さるべきものである。外生には深く感謝しなければならぬ。徹)

此の様な書物の紹介機關が近來よく出る事は、讀書界に取つて甚だ悦ばしい事だ。自分等も希望をいへば、是等の機關が幾十萬を發行して居る新聞雜誌よりも、更に廣大なる區域に及ばんとである、及んで貰ひたい。西洋諸國に於ては、箇様な新聞雜誌(圖書紹介に關する)が殆んど讀書界の凡ゆる方面に及んで居る結果として、例へば都會に一つの書物が發刊されたことへば直に全國の讀書社會にそれが知渡るべきにその書名やその内容の大体が知れるばかりでなく、其の書物に就いての凡ゆる事が知れる、加ふるに立派な批評家がその書物に就いての批評を書いて居る爲めに、その書物が眞に良いと

は、書物の紹介を専門とする有力なる機關が西洋の如く日本にも備はらなければならぬ。其の機關にして新聞の數の如く幾十萬若くは幾百萬の發行數に上り、凡ゆる讀書家に及ぶといふことは、新報に廣告するといふことは、追々に減じて、皆此の機關に頼るとなる。さうなると、此處に始めて、出版者も便利を感じ讀書家も便利を感じる。然し、それはなかく、今直に行はるゝことではない。恐らく、有力なる出版業者が始めは義務的に得意先に無代價で配るといふ如き事が端緒になつて、追々人々が重寶に感じ、書物屋に注文してそれを取寄せるやうになり、益々その部數が多くなつて、遂に幾十萬といふ多數に及ぶといふ事は、恐らく餘程未來の事であらうが、何うか、それを自然の勢に任せずに、早く此處に達しなければならぬ。それを爲すには何うしても、唯自分の商賣上の便利ばかり計る事を捨て、其紹介機關が餘程立派に出來上らなければ、決して西洋の如く多方面に及ぶものではない。例へば、書物の紹介に就いて、殆んど其の書物の内容を實物に就いて見るが如く精密に涉らなければならず、公平な批評もせなければならず、なかく、入費のかかる事である。然し乍ら、入費がかかつても、毎月若くは毎日其の新開若くは雑誌が届けば其の際に出た書物を居ながらにして良く知る事が出来る。この譯になると讀書家も非常に便利を感ずる譯であるから、茲に於いて争ふて讀書家はそれを、求める。茲に於て、始めて價を拂つて其の機關紙を

日本圖書新報の發刊を祝し、健全なる發達を期す。男爵野村胡堂行

長 市 阪 大

が悪いとかいふ本當の價値が知れるから、大變に讀書界は便宜を感ずる。箇様なものが盛行はれて居る結果として日本の如く一つの書物が出るならば、それを直に新聞に廣告するといふが如きことは、却つて西洋にはない。無論絶對に無いなどいふ譯ではない。新聞にも無論廣告するは敢て日本と違ひはないが、然し乍ら、日本の如く大きな廣告をしなればその書物の價値が知れないやうなことはない。何にしても、日本では、相當の書物を出すに當つてそれが成功を期するには、動もするとい

が、その時分の日本は未だ進んで居ない。今日も未だ進んで居ないのである。だんく進んで行つて、西洋の機關の位置に達しなければならぬ。然し、何として、批評は嚴かでないならばならぬ。權威を以つて壓するといふ處迄行かなければならぬ。公平であらねばならぬ。そうでないと社會に益の乏しいとは勿論、雑誌の存続から至難である。其處にはいろいろの情實があるであらう。例へば、關係の深い本屋の物を誇張して賞めるとか、嫌ひな本屋の物を悪く紹介するとか、いろ／＼な事情があることであらう。然し嚴正な態度で行かなくては發行高を數十萬數百萬の多きに高める事も出來なければ廣告を取る事にも成功が出來ない。此の種の新聞雜誌の經營はなかく困難な事である。私の話はなかく、一萬五千を刷るのです。斯うな話すると、一萬や二萬では駄目である。數十萬或は數百萬といふ處まで達しなければいけません。此の種の雑誌には「分賦區域の廣い」と云ふことが最も大切で、矢鱈に出來るとでないから、その書物によつて、その方面の大家から批評をして貰ふといふことではなくてはならぬ。それをするには夥しい入費がかかる筈である。此の抱負を以つて著々發展するといふ覺悟で行かねばならぬ。●書物によつては、一つの物に、數十頁數百頁を費すとも、外國に常見る所である。●以上は先生の座談を、思ひ浮ぶが儘摘録して見たものであつて、よく用ひらるゝ文句のやうであつて、文責は記者に在るのである。先生のお話を、その儘筆記するといふ心持で書いたものではあるが、側にゐて先生の談らるゝ所を、耳から受取り乍ら、耳のまゝを手で寫し取るのとは違つて、あとで、思ひ出しつゝ書いたものであるから、先生のた話の私とした一種の翻譯であるといふことは否まれない。文責私に在る所以である。(徹附記)

社員一同

ラム教を開き、亞拉比亞を征服統一し、其の嗣オスマル・オスマン等頻りにコーラン(教典)朝貢・朝貢の三者を以て外國を侵略し(サラセン國を建て)遂に中央亞細亞・印度・西部亞細亞を侵略し東羅馬・西班牙・法蘭西等に迫り歐羅巴人を懾怖せしめた。後セルジウトルコがサラセン國の衰ふるに乘じエルサレムを占取した。エルサレムはキリストの墓の在る處で同教徒はこの地に聖地である。サラセンがこの地を占領して居た中は參拜教徒を優待したが、セルジウトルコになつては甚だしく之を嫌ひ迫害を加へたものである。このころモンスイフ處に大會議を開いて遠征軍を興した。これが世に謂ふ十字軍である。前後七回師を發したけれども、エルサレムは恢復することが出来なかつたのみならず、獨逸帝ブレデリックが途に溺死せらるゝ様な慘禍が續出した。又元の鉄木真が起つて軍を四方に派し、攻略を恣にしたが、太宗紹ぎ更に其甥海都を元帥として歐羅巴を攻略せしめた。先づ今の露西亞の南半及ホンガリーを略し進んで北歐羅巴の連合軍を破り思ひ切つて其暴威を逞うした。ものであるから歐羅巴各國は震駭恐怖爲す所を知らず仰ぎ見るものがなかつた位である。此等の事實は實に白人をして怨恨骨に刻み髓に徹し何時かはこの怨を晴らすでは己むものか殊にセルジウトルコの宗教的迫害は何處迄も報復せんは已まざるの念を強忍ならしめ遂に拔くべからざるに至らしめた。これ即ち充實を圖らねばならぬと同時にその大勢の推移去來する所以を明に知らしめねばならぬ。

開國大勢史の内容、之を要するに我が國今日に於けるが如き發達は最近四百年間に我が世界的外交の將來せし賜である。殊に維新前後の強烈なる列國接觸は此の感深くするのである。本書は三百八十年前天文年間西洋人が日本を發見せし事件に筆を起し、日歐初期交通時代の形勢を叙し、進んで大名使節、新歸朝者西洋文明を傳へしことに及び、秀吉の豪邁比律賓の通商を許せしこと、和蘭國會日本との通商開始を議決せし大勢を論じ、更に日本が始めて目的を説き、家康西教を禁せしこと、西教信徒及宣教師の迫害起りし情況を審にし、初期の海防論、ナポレオン戦争の影響、内より鎖國を破りし學問、米國提督ポルトの日本開國論、ペル米國提督の真相、物價騰貴武士の貧困、極東に於ける英露の角逐、スエズ運河開通の形勢、幕府の出處進退を誤りし外交政策の一變、條約改正成功の真相等此の他幾多の問題に關し詳細説明を加へたものである。

其の大勢に關係せざる人物等は寧ろ省略し直ちに我が國維新の由來せし源頭を討尋し西勢東漸し日本海岸に激して大波濤となりこれを颯洗して遂に鎖國政策を一擲せしめ、發展して世界的日本を現出したる光景を叙し世界的雄大な思想を養ふことに努めたのである。從來の著書との比較

告白

肅啓愈御清穆慶賀の至りに奉存候さて不肖儀素より無名の一市人に候得共幼時より印刷業に従事仕り幸に社會の進運に導かれ逐日發展の域に進み目下倍々奮闘を繼續致居候是れも申も偏に皇恩の賜ご存じ日夜佩銘罷在候就ては如何にかして天恩の萬一を報じ奉らんと只管肝膽を碎き居申候處微力菲才の身適當の術も是なく永年悶々の内に經過仕り候然るに今回圖らずも有志諸賢の御勸奨を得て茲に『日本圖書新報』を發刊致し聊か教育界、出版界及讀書家の便益を計り度心願に御座候申すも嗚呼がましく候得共新聞雜誌發刊の事業は難事中の難事にて千辛万酸を嘗め經營に謁すも猶ほ且社會に存在を認められぬ程の者に候得者並大抵の決心にては従事致し難く既に發刊の覺悟を極め候上は所

60 65 70 75 80 85

大正三二月號  
成身の秘訣

# 青年の書簡が立身に及ぼす影響

早稻田大學圖書館長 市 嶋 謙 吉

## ◎門出の第一歩は手紙たり

手紙の巧拙が成功と云ふことに極めて大切な關係を持つて居ることは前に改めて云ふ迄もない位のものである。一體學校の卒業生などが愈々校門を辭して世の中に出て、會社銀行其他有ゆる方面の職業に就いて先づ處世の途に踏み出すに當つて何が最も必要であるかと云へば、一番に先立つものは實に手紙である。實社會の所謂事務と云ふもの、第一機關は此の手紙であつて、青年が十數年の間、小中学校より大學教育まで受けて、愈々世の中に現れ出て、何よりも一番最初に腕を振ふ處は何であるか。實務に携はつて先づ第一に腕を振はねばならぬのは手紙である。他に色々の蘊蓄が澤山にあるとしても其等を發揮する機は云ふものは後である。先づ手紙によつて最初に手を附ける事務に對する手腕を認められて然る後のことである。故に手紙の巧拙と云ふことは實に青年の門出に於て、其の人格を査定する、標的となるものと云ふて差支ないのである。

如何に才能あるものでも手紙が書けないとか、或は書が拙であるとか、先づその門出に於て非常な不利益に遭遇する。此の事は少しく世間の實狀を見た者は何人も疑はぬ處であつ

—(青年の書簡が立身に及ぼす影響)—

て、若し不幸にして手紙が拙であると、其の手紙を見ただけて大凡どんな人であらうと、其の人となりや判斷されて仕舞ふ。而して青年の門出に於ける第一歩と云ふものは多くは其後迄長く影響を残すものである。

## ◎成功の遅速は茲に基ぬす

世の中には相當立派の人で、顔と顔を合せて話してみると、人品も高く辯舌も達者な立派な人であるのに、切て手紙を書かして見ると極めて拙で、其の手紙を見ると非常の不愉快を感じる様な拙な手紙を書く人もある。かと思ふと其の人に遇ふて見れば格別な人間でもないが、其の手紙だけを見ると極めて立派で、文章も文字も殊に秀れて居つて惚々する様な手紙を書く人もある。

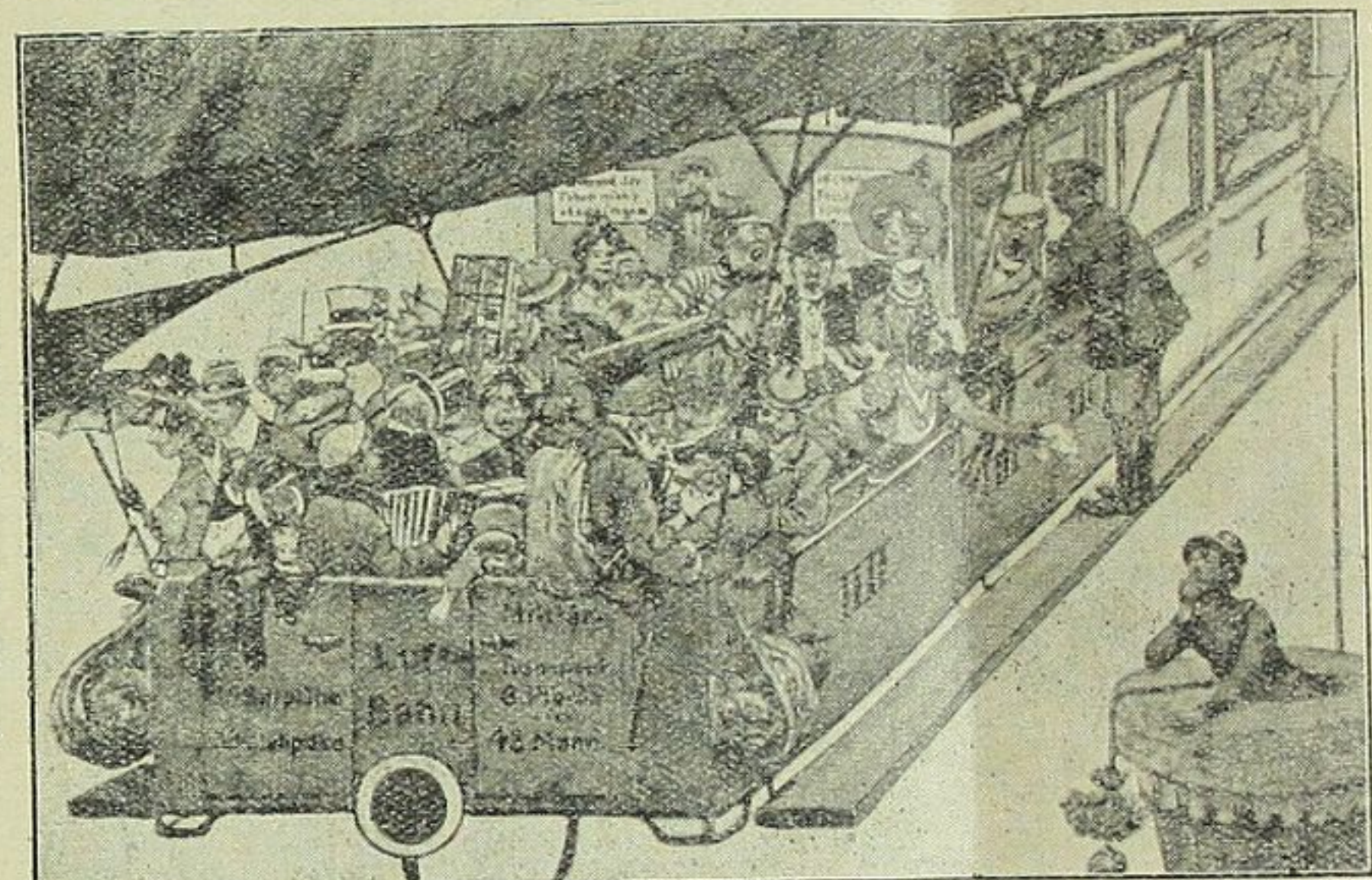
斯様の場合に何れが前途の成功に對して早いかと云へば、無論手紙に達つて居る方が早いと云はねばならぬ。勿論手紙が拙であるからと云ふて其の人が全く成功せぬと云ふことは無いが、然し其れは他の長處があつて其の拙なる處の短處を補ふから成功するのである。従つて若し此人が外に長處のある上に更に手紙にも長じて居るならば、無論其の人は一段早く成功する道理である。



### ◎手紙の輕重に對する古今の相違

大隈伯の如き青年時代より手紙を書かず、今日に至つては無論書かない人であつて、若し手紙を書く必要ある場合には、書生時代の如きは直ちに馬に鞭打つて其の人を訪ふて事を辨ずる、又は人に書かせて用を便すると云ふ人もあるが、是等は異數とも云ふべきもので、是を推して一般の例と爲す譯には行かない。

昔の様に交通が不便で極めて重大の場合でなくば殆ど手紙を書かなかつた時代には、手紙の巧拙などは立身出世に大いした關係はなかつたかも知れぬ。假令ば徳川期の手紙などを見ると、多くは極めて簡單なるもので書外は持參者の口上に譲ると云つた式であるから、手紙の巧拙などは斯る時代に於ては格別大いした事ではなかつたであらうが、今日の如く交通も開け、僅かに三錢を投ずれば千里の先方まで手紙を送ることも出来る世の中に於ては、どうしても手紙の巧拙と云ふ事が成功に對して非常の關係を持つと云ふことは云ふ迄もないことで、此點は實に古人の夢想だもせなかつた處である。



(一) 會社の後盛隆器行飛

### ◎立身の端緒を茲に發す

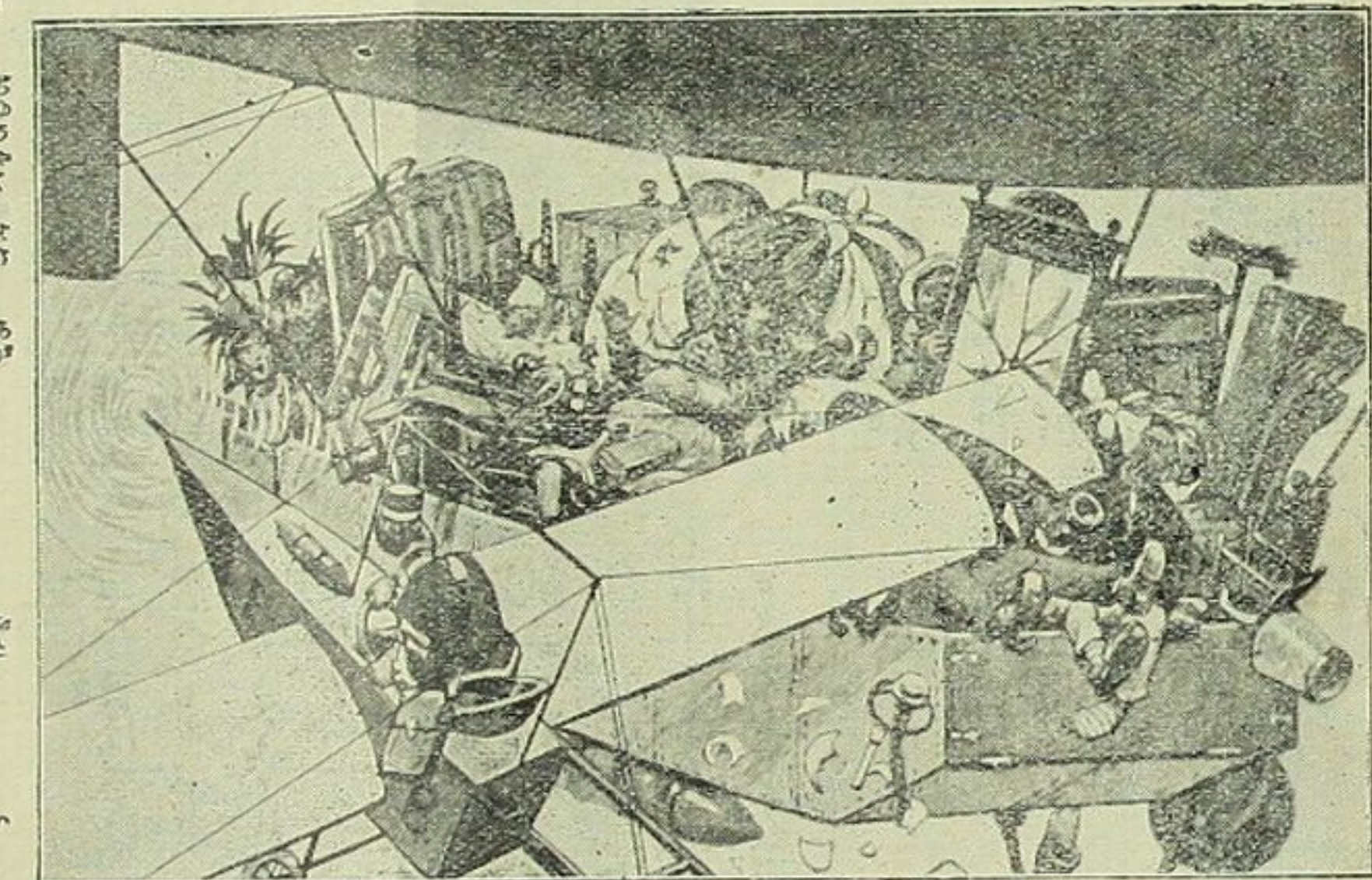
勿論昔と雖も見ず知らずの人に對して手紙を送つた爲め、其の人に知られて知遇を受くるに至つた、其れが端緒で立身出世したと云ふ例は決して尠くない。假令ば頼山陽が白河樂翁に書を奉つて、公の信寵を博したことは何人も知れる事實である。其の書は漢文で書いてはあつたが、無論手紙と云ふべきものであつた。

今日は最も手紙が頻繁に用ゐらるゝ世の中であるから、手紙によつて人に知らるゝ機會は時々刻々であると云はねばならぬ。今日相當に成功して居る人々の中には、手紙を以つて成功の緒に就いたと云ふ例は決して尠くない。夫れも其の筈であつて、學校の門を離れて世間に出た青年で、先づ事業界に入つて申付かる擔任は矢張文筆上の事が多い。假令ば秘書役の如きは多く是等の人々の役目となるのであるが、扱て其の秘書役なるものが、主人公若しくは上役の命を受けて色々の場合に書いてやる等の手紙に於て、充分に主人若しくは上役の意中を盡し、随分困難な問題を解決すると云ふ程の技術を現すに於ては、必

ず其の主人公若しくは上役が、其人に對して信用を置くことと云ふ端緒を茲に發するものである。

### ◎秘書役出の出世する理由

會社銀行などの繁劇なる社長重役の如きは、無論非常の繁忙中に物事を命ずるのであるから、其の秘書役なるものは詳しく其の用件を聞いて、手紙の書き方までも聞いて仕事をすると云ふ様な事は事情が許さん。従つて其の衝に當つて手紙を書く者は主人公若しくは上役の意の存する處を度つて一言を聞いて痒い處に手の届く様に其人の意を現すと同時に、相手方の意衷をも推量つて其に投合する様に手紙を書かなくてはならぬ。この役目を遺憾なく果すには手紙を書くことと云ふことに、餘程の才と技術とを積まなくてはならぬ。



(二) 會社の後盛隆器行飛

斯様にして上役の信用を博して調法がなれる様になると自然機密の事柄にも參與するとなつて、將來拔んで重役の席に上つた例は、自分の知つた範圍内にも三人や五人はある。昔から人の記室(秘書役)を勤めた者が樞要の位置に登つたと云

### ◎文と書と相侍つたもの

勿論文章も相當でなければならぬが、同時に文章以外に大切な事は書である。如何に文章が美しくとも書が其に供はない場合に於ては、見る人に對して快感を興ふる事が出来ない。詰り書の拙なる爲めに文章が拙く感ぜられ、或は理解されないといふ云ふことは數々ある事である。勿論事務上の書翰と云ふものには種々形式があるもので、事務一片の手紙に於ては必ずしも能書たるを要せん。唯々字が間違はず、読み易く華やかであることと云ふ位で事は足る譯であるが、事務を離れて己の情意を通ずる手紙に至つては文章も美くなければならぬと共に、書も美くなければ相手を動かすことが極めて困難である。然し文章も書も美しいものには随分一本の手紙で、頑固な説き難い人を説き落したと云ふ例もある。書き次第によつては讀みながら愉快を禁じ得ない結果として、假令金の無心を云ひ掛けられた場合に於ても、つい其の手紙に動かされて心善く其の無

心に應ずる氣になる場合は實際に於て決して少くない。是れ實に手紙の力のある處で、頼山陽の手紙などになると随分色々無心を云ふた手紙の中にはあるが、極めて面白く書いてある爲めに、手紙を寄せられた人が其の無心を拒絶することが出来ない様に持掛けられ、溢々てなく、興に乗つて心善く其の無心に應ずるに至つたなどと云ふのは、全く手紙が人を動かす結果に外ならぬものと云はなくてはならぬ。

◎辭句の練習をも要する

斯様な手紙を書くのは餘程の熟達を要するもので、容易に山陽の如き眞似の出来るものではないが、然し成功を期する上に於ては其の人も動すの妙趣が、矢張山陽あたり迄達することを期せなければならぬ。全體手紙と云ふものは人と對話すると異つて、對話の場合には相手の顔色を見て話し損ふたと思つた場合、或は相手も氣色を害したと思ふ場合には、色々云ひ替へて自分の要求點に話を持つて行くことも出来るが、手紙では人の顔色によつて話頭を轉じると云ふことは出来ない。一旦書けば取返し附かぬものである。であるから、どうしても相等の熟練を積むの必要がある。

全體手紙ほど能く其の人を現すものはない。假令ば如才ない人が、相等の文筆を持つて手紙を書けば、其の如才ないことが必ず解ると云ふ位のものである。同時に傲慢なる人が手紙を書けば自ら傲慢の調子が手紙に現れ出ると云ふ様に、自分が現れると云ふ點は至極善いことではあるが、然し唯自分の性格許りを遺憾なく現はしたと云ふ丈けて事が成功するも

——青年の書簡が立身に及ぼす影響——

のではない。却つて其が爲めに失敗する事は往々あるのであるから手紙を書くには辭令に爛ふと云ふこと、相手によつて敬語を取捨すると云ふ様な鍛鍊をも經なければならぬ。

今日は手紙が充分なる働きをする世の中であつて、座つて居つても手紙さへ善く書けば随分成功の期し得られぬこともない。云ふ程の交通發達時代である。然るに實際は却つて手紙の書き方が段々等閑に附せられ粗暴に流れ益々劣悪に陥ると云ふことは不思議の現象である。中には開いて見て劈頭から不愉快の感を起さしむる様な手紙さへあるとは實に遺憾千萬な話で、苟も成功を期する人々は、其の如何なる方面に向ふにしても手紙を書くことを疎略にすることはあつてはならぬ。否な進んで大いに手紙に皆熟することを心掛けなければならぬと信ずる。(文責在記者)



A large empty table with multiple vertical columns, likely for notes or a ledger.

春城夜話

豫告

(市島謙吉氏)

嘗て我が新潟新聞の筆にして目下早稲田大學圖書館長たる春城市島謙吉氏は趣味最も廣く交友最も多き人也。氏、我社在京記者の乞に依り、其の該博なる經驗と豊富なる智識とを傾けて、特に新潟新聞のために、今後永く、其の興趣饒かなる談話を試みられんとす明日の紙上より連載せんとす『春城夜話』、即ち之れにして、雅俗方面に亘れる談話は、滾々として長く書きざるものある可し。又これ本紙の呼び物たらん乎。

新潟新聞に一箇の呼び物を作る可し

氏の談叢を御載せんことを乞うた。之れに對する氏の答へは、下の如くであつた。それは固より異議もないが、近來は少し忙がしい用事もあるもので、落ら附いて談話の材料を考へて居る餘裕がない。併し自分の癖として、時々の見聞、感想等を何くれとなく書きつけて置く。今日では其れが積つて既に二百冊に達して居る。多くは先年、鎌倉や熱海などに養病中、書きつけて置いたものであるが、之等の中には、多少面白く思ふものも無いではない。尤も中には、全くモノにならぬものも交つては居る。で、先づ之等の中から面白うなものを選び、少しづつ話をし、願ふ何れか考へることにせうか。云々。

『春城夜話』掲載の由来は、斯くの如くである。思ふに今日、新聞界の傾向は、其の紙面に「面白い読み物」を充溢せしむること、之れである。地方の新

聞界に於ては、未だ此の傾向が顯著であると云ひ兼ねるが、早晚此の風を示すに至るのは、豫見に困しむる所である。我が『春城夜話』が、此の點に於て、十分に讀者諸君の渴望を慰するに足る可きは、記者の先づ以て保証するに躊躇せざる所だ。第一に紹介せんとするは、「奇抜な天神譚」と題する珍事實である。先づ明日の紙上を見たまへ。(在京記者)



が熱海の旅舎に療養の頃、落伍生(文  
 學博士吉田東伍氏)が来て、菅公に關  
 する話を交へたことがある。もとより  
 床の上に寝そべつての不用意の談話に  
 しか過ぎないが、流石に聞くに足るも  
 のがある。予の長く不審として居るの  
 は、菅公が没する間もなく、神に祭ら  
 れたといふことである。或る程菅公は  
 藤氏のために流竄を喰つて、氣の毒な  
 最後を遂げたには違ひないが、死後間  
 もなく神として祭らるゝほどの人でもな  
 やうに思はれる。で、幸ひ落伍生が來  
 たから、此事を質した。

たと言ふは、全く此の頃の持勢が然ら  
 しめたこと云より外はない。相馬の殿様  
 が死んでから、餘程経つて後、錦織な  
 んといふ山師が何か言ひ立つれば、一  
 時人の耳目も之れに集まり、明治の時  
 代に於てから一問題となつた位だ。こ  
 れも畢竟、時に投じたからである。

▲荒唐な幽霊談の利目 當時藤原氏の  
 勢力は、正に其の極點に達した頃であ  
 るから、鋭敏なる詩人が、何か豫言す  
 る時と云ふてもよるしい時代で、此の  
 時に當り、藤原氏に對する反抗の意味  
 から、菅公を氣の毒に感じたものもあ  
 るだらう。又藤氏の反省を促がすため  
 に、コウ物語をした者もあるだらう、  
 さうして藤氏といへども、自から省み  
 て、少しく遣り過ぎたと思つても居つ  
 たであらうから、巫女や坊主の言つた  
 幽霊談が、意外に利き目があつたので  
 あらう。併し如何に利き目があつたに  
 せよ、北野に神廟を設けられたのは、

到底異數たるを免かれない。  
 ▲類例のない御取扱 傳へには巫女が  
 菅公の靈の指圖で、地をこゝに相した  
 といふことであるが、併し北野といふ  
 處は、皇城とは殆んど咫尺の間と言ふ  
 てもよるしい位に接近した地である。  
 恐れ多くも地をこゝに相して、勅諭の  
 格式で神とし祀られたのは、誠に類ひ  
 のなきことで、天子の御血統の靈を慰  
 めんとて、其死後靈位を祀らたを例は  
 あるが、人臣に對してかゝる御取扱は  
 實に珍らしいのである。

\*\*\*  
 春城夜話  
 (市鳩謙吉氏)  
 (五)

△落伍生の菅公談 (二)  
 ▲ダシに使はれた菅公 そこで京都既  
 に斯くの如くであるから、次いで菅公  
 の流竄地たる太宰府に於ても、立派に

\*\*\*  
 春城夜話  
 (市鳩謙吉氏)  
 △落伍生の菅公談 (一)  
 ▲菅公の偉さが疑問 天神講の話をし  
 た序でに、もう一つ菅公談をしやう。予

廟が立てられた。勢ひが既に斯様であるから、菅廟を建つるといふことが、一時諸方に行はれたのも無理はない。勿論菅公を尊崇するといふ意味ばかりから来たのではない。どちらかと言へば、菅公をダシに使つたのであらう。當時は神社の所領は無税であつたから、已が財産を無税にせんことを欲し、租司と糾托して土地を由緒ある神祖へ寄附し、以て租税を免かち、捐策を弄したものが多し。菅公は當時甚だモテた神であるから、自分の財産保護のために、菅公に托して宮などを建立したものが到る處甚だ多かつたのだ。

▲菅公遺族の僥倖 右の如き内幕ではあるけれども、兎に角朝廷に於ても崇敬せられ、全國響の如く相應して崇敬することになつたものだから、後世まで菅公を崇めること、支那の關帝に於けるが如き勢ひとなつたのである。落伍生の話に、太宰府菅廟に屬する土地の帳面が、古文書として存じて居るさ

うだが、これに依つて見ると、其の所名の多大なる、實に驚く可きものであるといふことだ。例の寒附手段より方々に散つてあるさうだ。兎に角死後間もなく神と尊崇せられ、自然財産も附帯して生じたから、菅公の遺族には此上ない僥倖であつたに相違ない。

▲文學の神としての菅公 それから菅公を文學の神として尊ぶに至つたのはどうかと尋ねるに、恐らく大江匡房が「聖廟」と呼んだより来たのであらう。大江匡房は何故菅公をかく崇敬したかといふに、學問の系圖を引いて居る上に、藤氏に對しても内心面白からず思つて居たからであらうか。兎に角匡房もなかくの文學者で、文章の妙は確かに菅公の上である。實を言へば菅公は文學の神などに立てらるゝ人ではないやうに思はれる。學者なる此の人が流竄せられたといふ氣の毒心から、文

學にまで大なる價值を生じて、終に文學の神とまで崇むるに至つたものであらうか。(此項完)

### 春城夜話

(市嶋謙吉氏)

#### △梵唄と引導

▲佛教各宗の雜處 佛教の各宗はそれ／＼力を致す方角が違つて居る。たゞれば法華は主として下等社會、禪宗は一時武人の薰化を主眼とし、淨土は上流婦人の感化に力を入れたといふやうに、各々獲ふ處の方面がある。隨つて其の方面に依り、宣傳の仕方をもそれ／＼に工夫してある。而もなかく巧みに教諭がよくても、宣傳法がまづよくては、到底人心を感動させることが出来なからう。

▲禪宗と日蓮宗 今一二の例を擧げて

見ると、導では引導と云ものをやる。之れは如何にも眞實なもので、其の語調も甚だ激越である。さながら叱咤することさき句調であるが、戰國時代の武士を相手にしし宗教の眞影が、之れで判かるではないか。日蓮宗はシツペ上の句調で、太鼓を叩いて題目を唱へさせる。自力宗であるから、シツペ下の他方宗の句調とは、極反對な譯であるが、餘り上品でない。それも其の筈、魚河岸のかゝあ、さいなんどが其のた得意であるからだ。其處へ行くと淨土宗は實に貴族的だ。

▲淨土宗と京都女房 淨土宗はもと婦人の感化を主として立つたのであるから、婦人に受けのよいやうに、何事も工夫して居る。其の經を讀む聲や文を讀む聲は、儼かに誦鍊を経たもので、其の清く爽やかに、悲哀の調を帯びた聲は、樂器の聲の如きものが

ある。婦人も之れを聞いては、隨喜の涙を垂れ、非常の感動に打たれるを得ない。要するに淨土の梵唄は京都女房を籠絡するために工夫されたものである。

▲滿都梵唄の聲に充つ 自体梵唄といふものも、佛家に於ける一の音楽であるといふてもよろしい。京都の大原の某寺に、支那の魚山禪師が、美音を以て梵唄をやり初めてから、日本にも梵唄が大に研究されたのである。後年義太夫にまで此の節が傳はつたのを見て、其のなかくに勢力のあつたことが判るであらう。一時京都の市中は、梵唄の聲を以て充されたといふことが當時の歴史にあるが、恰かも今日の軍歌や鐵道唱歌を到る處に聴くと全一變であつたのである。

▲飛んでもない工夫 併し淨土などは只に聲の工夫ばかりに止めず、何でも婦人に受けのよい様にと工夫したから

美服も着けた。顔に白粉も塗つた。隨分紅も施した。要するに婦人に惚れらるゝ位でなければ、法も行はれぬと工夫したのはよいけれども、危険極まつた工夫で、抑も婦人を相手にするといふのが既に危険であるのに、其の上婦人の受の上きを誘ひるに於て、如何んぞ乱踏ならざらんである。法然上人の如き、常に宮中に入出し、天皇より嫉妬的の嫌疑を受けて遠嶋へ流され。法然の弟子で亂行のため、斬罪に處せられたる如き、其の顯著なる例である。今日本廟寺の紊亂を兎や角言ふが、實は淨土門に於て婦人の除外を救済したときから初まつたと云ふてもよろしいのである。天笠の如き熱帯地に於て、飽くまで婦人を遠ざけたのは、無理のないことである。

春城夜話

新井白蛾の占ひ振 (市嶋謙吉氏)

△新井白蛾の占ひ振
▲黒牛と赤牛 新井白蛾は、真瀬中州
なごに比べると、時代が早いだけに、
一段易は上手であつたやうだ。嘗て高
嶋吞象に會つた時に、白蛾の占ひぶり
は何うであつたかと聞いたが、吞象の
曰くだ。白蛾は加州侯に三百石で抱へ
らけたが、ある時候の供勢に加はつて
旅行中、ある田舎道を通ると、赤牛と
黒牛とが草原に臥して居る。君公之れ
を見て白蛾を召し、黒赤の内、何れが
先きに睡りを覺すか、それを占つて見
よとの仰せが出た。

黒し、黒牛先づ起きんと申上げた。そ
こで加州公も供勢も、物敷奇にも牛の
起きるまで休憩して待つて居ると、果
して黒牛の方が早く眼を覺ました。白
蛾の判じ方は先づ此んな風であつた。

春城夜話

東西史家の相違 (一) (市嶋謙吉氏)

▲先づ開中の事を思へ、誰れかの處世
の秘訣の中に、人の家を訪ふたら先づ
奥向や臺所の方を覗いて見よ、威嚴あ
る人と應接するときには、其人の聞中
のことを思へといふやうなことがある
が、之は如何にも名言である。豪傑風
の人に逢へば、動もすると其の威嚴に
呑まれて縮まりかへるのが、なべての

春城夜話

五人組と米穀取引 (市嶋謙吉氏)

△最善の自治制度 世界に自治的行政
制度の最もよく出来てゐるのは、日本の
幕府の頃の五人組制度と、諾威に於け
る之れに等しき制度である。一部落の
名主にひとしき自治的役人は、其の部
落の住人の爲人や功罪をよく知つてゐ
るから、其の裁判が原被を心服させるの
も無理はない。維新の頃ある外國人が
日本へ来て、福澤が學者だといふこと
を聞き、日本には五人組といふものが
あるさうだが、どうか其の詳しいこと
を知らせて呉れと頼んだ處、福澤は知
らなかつたので、外人も不思議に感じ

人情で、既に呑まれた上は、豪傑は何
處の何處迄もわらく、甚だしきは種を
異にするかの如く考へ、尙ほ甚だしき
は鬼神の如く考ふるに至るけれども、
本來英雄豪傑といふても、ある點はわ
らいかも知れぬが、大抵の點は普通の
人間と違つて居る筈はないそこで、最
初に奥向を覗いて見て、なまめかしい
女の聲が聞れたりなどすると、普通の
人間と違はないことがわかるから、呑
まれないでも済む。又豪傑が如何にわ
らさうなどを吹いても、ナアニ聞中で
は女にでれつくだらうと想像してかゝ
ると格別恐るゝに足らない様になる。
實に或人の言は、處世の名言であるの
みではない、本來人間を見るには、此
心掛がなくはならないのだ。
▲天子の歴史は神の歴史 就中歴史家
などは此心掛がない時は、歴史が死ん
でしまふ。そこへ行くと西洋の歴史家

などは感心だ日本では、わらい人は何
處迄もわらくしないぞ承知しない。一
口に言へば、欠點のないものとしなけ
れば承知しない。殊に皇室のことなど
に至つては、神の如くに書かなければ
不敬のやうに考へて居るから、天子の
歴史といふものは、丸で神の歴史のや
うに、不可思議極まつたもので、趣味
もなければ活動もない。處が西洋では
不敬に亘らぬ限りは、皇室の内幕を書
くことを忌みも忌まない。随つて天子
も國王も、人間として寫すことが出来
るのである。
▲皇帝陛下の戀物語 例へば英國のジ
キクトリヤ皇帝陛下が、其の夫たるア
ルバルト陛下を戀慕して、遂に夫婦と
なるに至りし迄の始末の如きは、些し
も憚る所なく麗々と書いてある。又陛
下が分崩の折のことなども詳しく書い
てある。之れは人間として當然のこと

たといふことであるが、當時の福澤翁も西洋に偏したハイカラであつたらしい。

▲米穀取引は日本が模範 之れに能く似た話が、モウ一つある。我が日本に於ては、有價証券の取引こそ、海外に倣つて、漸く開けるに至つたのであるが、プロジユース、エキスチエンズ、即ち米穀取引の方になると、日本の方が外國に比して遙かに古く開け居り、取引の方法も我國の方が、餘程進んで居る。それであるから、日本より取引所のことなどを外國へ調べに行くこと、外國人はナゼ来たか冷かす位で、役人などは外人に冷かされて、初めて自國が寧ろ模範であることを知つた位にといふことである。言ふまでもないことだが、何んでも彼でも歐米諸國が吾れに立ち優つて居り、凡ての事物皆な彼の方が早く開けて居ると考へるのは

愚の至りであらう。

△關八州の橋の請負

▲木橋の倉田 むかし深川の木場に倉田といふものがあつて、江戸を初め、關八州に於ける橋の架け換や普請を一手で引き受けてやつて居た。當時橋の建築費といふものは、一間百兩から百五十兩までとあつたもので、難作もなく普請をした。此の倉田には番頭が四人もあつたが、職人は五十人ぐらゐしかなかつた。それで東京どころか關八州の大橋梁を、差支へなく造つてのけたが、今はなかく、仰山のものである。と例の存翁が語つた。

春城夜話

▲東西史家の相違(二) (市嶋謙吉氏)

▲缺點を蔽ふにのみ腐心 處が日本なごでは、こもする史家は此邊の筆を省くの徳義だなど心得て居る向もある。徳義と心得て書かないのはまたしもだが、動もすると尊貴の人や、豪傑や英雄に丸切り吞まれて仕舞つて、史家は只一概に之を有難がるのみで、缺點を蔽ふに汲々として居るのが多い。之等は實に沙汰の限りと言はなければならぬのである。

▲白石は流石にわらいをこへ行く 新井白石などは、實に前に述べた或る人の秘訣を胸間に置いて、古人と相對するのであら、缺點は缺點として、容赦なくさらけ出す。左れば白石の寫した太閤でも頼朝でも、其他の英雄豪傑でも、まことに他愛もないもので、「ナアニ彼奴が」といふ調子であるから面白い。缺點は缺點に人間らしく書いて、而もわらい點をわらいとするから、愈々其のわらい處が引立つて來るのである。

ある。(此項完)

▲上杉謙信の違約

▲謙信の箱も少し割ける 星野彦四郎といふ歴史專攻の文學士(五十嵐甚藏氏の囑を受けて越後史を編纂しつゝある人)が取調べた事實だとして、高橋義彦君の語る所に依ると、上杉謙信が上絡して、朝廷の式徴を歎じ、用度の窮乏を慨して、若干の米穀を贈するの約をなし、爲めに高官を拜したといふ事實は、歴史の上にも上つてゐる事實で、謙信を褒める一つの材料となつて居るが、京都の紳商家當時の記録を段々取調べると、甚だ相違の點がある。之れで見ると、謙信は米穀贈上の約束だけは、確かにしたに違ひないが、歸國と共に約を食んで、遂に廢上しなかつたのださうで、謙信の箱も幾許か此の事實に依つて割けたまになるのである。

▲當時流行の猜手段 全体武家には斯

ういふ猜手段を取るものが、往々あつたのである。毛利の如きも嘗て全様の約を立てる官を貰ひ、其後違約した例もあるもので、京都ではこの先轡に鑑みて、謙信とは極めて嚴重な約束をしたさうであるが、又々全一手段に依つて欺かれたものが見える。

春城夜話 (十三)



奇なる衛生法

迷信から水を撒く 昔しコロリの流行つたころ、今の萬世橋のある筋違に番所があつたが、葬式のことを通るの

春城夜話

渡邊華山論 (一) (市嶋謙吉氏)

本年は渡邊華山歿後七十年に當り各所に於て其の記念會を催されつゝあるを以て市嶋氏の隨筆中より特に華山に關する言説を拙き來つて「春城

春城夜話

渡邊華山論 (二) (市嶋謙吉氏)

華山は、三河の田原藩で、其の舊藩主の重野博士が抹殺した兒嶋高德の後

春城夜話

渡邊華山論 (一) (市嶋謙吉氏)

貧富は華山を偉物にす 華山は誰れも知ることく家の貧なる爲め青年の頃より繪を賣つて家計を助けざるを得な

春城夜話

渡邊華山論 (二) (市嶋謙吉氏)

も、恐らく繪を書くことが其の媒介をした重なる原因であらうと思ふ。何故

居る處に依り見地を異にすることは免

▲小露に生れた華山の幸 華山は田原藩の如き小露の大夫として實に惜しい傑物である。此の利器を容るゝには、

春城夜話

渡邊華山論 (一) (市嶋謙吉氏)

たであらう。併しながらつくづく考へて見ると、藩が貧乏で華山も幼少から

春城夜話

渡邊華山論 (二) (市嶋謙吉氏)

其の學問に於ても、畫道に於ても分明であるが、意外の事は此人が生れて幾

人より眼がよく見ゆるものか。雄辯家を以つて聞こむる嶋田三郎君のごときも、幼少の時は口が利けなかつたと言はれたこともある、少し常人より遅く口が利ければ常人より大いに口が利けるものか。其の生理作用は如何にもあれ、彼は天下に先んじて、將に來らんとする時勢を觀、畫に於ては前人の幾度見ても看破し得ざりし南宗の妙趣を看破した。華山はご目の達者のものはないと云ふても差支なからう。

### 春城夜話 (五)

(市嶋謙吉氏)

#### △渡邊華山論 (三)

糊口の爲にせし繪畫 華山は畫に於て天才である。勿論父なる人も巴州と呼びて畫を書き、弟にも如山といふ畫をかきものがあつたから、血統にも由

るであらうが、華山は行くとして可ならざるなき天稟の才があつた。彼れは家の貧なる爲めに行燈や盆燈籠や錦繪や俵箋の口繪など、或は糊口の爲めに書いた。個様のものを書き慣れると、多くは畫が野卑に落ちて仕舞ふのが例であるのに、彼れに於ては少しも餘弊を受くことなく、却つて糊口の餘義なき走筆が、手習となつて、何人も及ばざる氣韻ある畫を作るに至つた。勿論華山とて初めより名手であつたのではな、あゝ人の評しに、華山が同人間に持離さるゝ程になつても、まだ世間に名を知られなかつた頃である。ある時、銚子邊に旅行してさる人に遇つた時、其人から江戸の某畫家に、一枚の揮毫を周旋せよと依頼を受けたこともあつた。云ふ。其の畫家と云ふと、其の時分華山などの齒牙にもかけざる拙劣のものであるのに、名馬も伯樂に遇はざ

れば、コナ辱めを受くることがある。華山の土佐繪 又華山と幾度も流派をかへたらしく思はれる。南宗とは懸隔の最も甚しい土佐派をも一時は學び、試みたらしく、或る知人は曾つて華山の書いた土佐繪の畫巻物を見たことがあると云ふた。それはなかくよく書いてあつて、土佐派を造つても必ず成功したのであらうと云ふて居つた位である。華山は又幼少の頃戯れに人形を書き、しばし人の激賞を博したと云ふ事が傳はつて居るが、童戯の人形畫は、後に糊口を助くる業と化して幾多の風俗畫を作ることを餘義なくせられ、それが爲めに益々鍛錬を経て、人物の寫生は頗る妙境に達した。華山の人物畫は實物に酷似して居るのみならず、神樂の活躍して居る點に於て、何人も企だて及ばぬ特長がある、これ

は筆者が崇高の人格を有する人丈に自づから精神も飽み譯でもあるが、西洋畫を研究したのも其の原因をなして居るに相違ない。

### 春城夜話 (六)

(市嶋謙吉氏)

#### △渡邊華山論 (四)

西洋畫研究と人形繪 華山は長崎の通譯などを頼んで、西洋畫を集めるには、餘程苦心をしたものである。當時西洋畫などは、なかく手に入らなかつたので、僅かに石版畫などを従つて研究の材料に充てた。云ふが、晝影や繪の具の遣ひ方や、遠近の取り方などは、確かに會得して、之れを山水や花卉などを書くに用ひたことは、作品に就ても知ることが出来るが、取りわけ人物

畫に應用して成功したことは確かである。全体南宗派の畫家は、概して人物の寫生に拙であるのを例とするは、華山ひと群を抜いて居る。さて其の淵源に溯つて見れば、幼少の頃人形を畫いて戯れたより胚胎して居るのである。華山の畫は人格の反映 山水畫は南宗派の主とする所で、華山の此の道に成功したは申す迄もない。全体華山は文人畫で成功すべき、あらゆる性格を具備して居つたと云ふてもよい。と云ふ譯は南宗畫は士大夫が學問の餘暇に始めた素人畫である。専門畫家の如く繩墨を守りて畫く畫とは違ふのである。此派の畫は其の人の學問や識見で書くのであつて、其最も貴ぶ氣韻と云ふものは、筆者の人格や精神が、紙に映るのを云ふのである。故に其人の志趣が高く無ければ、氣韻は高きを得ぬ道理で

ある。華山は小藩ながら一番の主宰で、地位もあり、學問もあり、氣概もあり天下に率先して時運を看破する見識もあつた。此等の性格と、文人畫を畫くに、何れも大切な資質である。彼れが作品に淋漓たる氣韻の溢るゝも道理である。彼れが近世南宗派の巨擘となることを得たのも道理である。現んや彼れは畫に於て天才である。彼れは亦廣く西洋畫をも研究して、其の長所を咀嚼し、自家の藝苑中に入れた。此等は皆な彼れの畫を大成せしめた所以である。尙ほ之れに加ふるに彼れの境遇は、平壤にあらずして峻山深谷のごとく險惡であつて、胸中に蟠まる鬱勃は發するに由なく、之れを漏らすの術は唯だに畫に寓するの外無かつた。華山は此點に於て、確かに近世第一の人であつた。彼れが如き波瀾多き境遇の人と

して、其の筆端に迸るものが、何れも言ふ可からざる氣韻を現出して居るのは、理の當に然る可き所であらう。

### 春城夜話

(市鳩謙吉氏)

### 渡邊華山論

(一五)

華山の作品と含蓄 支那人の繪を見ても、不平の人の書いたものには、最も味はひがある。平凡の境遇に居つた人の繪は、如何に立派でも、巧みでも其の氣韻に於て、何んぞなく缺けた所がある。此の點になると、華山の繪は殆んど他に類例のない一種の味はひがある云ふてもよい。且つ彼の作品の多くは、何んぞなく寓意が存して居るやうに思はれる。繪畫も文章も同じことで、含蓄を多くするといふことが最も必要であるが、華山の畫は、甚だ

此の點にも富んで居るのである。鐵翁の華山評 長崎の鐵翁は近世繪畫界の名家であるが、其の華山論は最も能く我が意を得たものがあるから、其の節を抜かう。

僧雲室、高久鶴、椿椿山、渡邊華山の四家を以て、近代東國南畫の稱首となすと雖も、其の能く眞に眞氣を脱したるものは、華山及び椿椿山なり、此の二子の花卉翎毛、元と南田秋穀の間より出で、而して翎毛に至つては特に南田に近し。華山は其筆天資強健、氣運生動、晩年に至りて廣く各家の長を了得し、花卉人物、毛及び山水等、筆々虚飾なく、繁簡共に之を喜ぶするのみならず、頗る愛國節義の氣象に富めるを以て、精神勃々として充滿し、筆力強勁なりと雖も、而も弱氣を帯びず、眞に自然の性情を寫し出すことを得たり云々。

華山の畫を論じて、最もよく肯綮に中つて居ると惟ふのである。渡邊華山と田能村竹田 南宗畫家中眞に士大夫の畫として成功せるものは東に於て華山、西に於て竹田を推す可しであらう。華山と竹田、各々一長一短はあるが、併し其の境遇に於ては双方全然異なつて居た。竹田も學問のあつた一種の人物で、其の書いたものにも氣韻があり、所謂書畫き渡世の者の類でなかつたのは言ふ迄もないが、只其の境遇が平坂であつた爲め、畫も亦之れに準じて平坂を免れなかつたやうであつた。此の一段に至つては、畫家は何と評するか知らぬが、境遇と時勢に應じて、自から舞臺の人となつた華山の畫は、竹田に比して一層の趣きがある。我々は嶋國に居故かも知らぬが、華山の繪に對して、常に實際に斯ういふ感じを起すのである。(此項完)

### 春城夜話

(市鳩謙吉氏)

### 最初の西鶴私淑者

隠れたる文壇の貢獻者 渡邊邊に淡嶋寒月といふ人が居る。これは併人で、自から悟脱したつもりで居るさうなが乞食に向つて言語を交へるのも、通常人に對するの少しも違はない。觀音を賣して乞食に強請られ、素直に幾何かの錢を取らせるが、歸りがけに又全じ奴が強請ると、あなた方には先刻上げましたといふやうな調子である。此の人如何ほどの俳句を詠むかは知らぬが、明治の文學史に、聊か没す可からざる關係がある。其の故は、露伴や紅葉をして、當初西鶴を味はしめたのは此の人であるからだ。西鶴ものゝ供給者 散紅葉の傳の中

にも、或る人より西鶴の著書を多く借覽するの便を得、それより一層西鶴に私淑するやうになつたと書かれてあるが、其の或る人とは誰れのことかと思つて居た處、日外坪内逍遙に聞けば、それは即ち寒月のことであつた。當時は西鶴の書などを珍重して所持するものは絶無であつたのに、寒月のみ數多の奇書を藏し居り、遂に是等文章をして、一代を風靡するの文學を出さしめたのであるといふ。寒月は西鶴ものゝ供給者として功績あるのみでなく、夫子自身天下に先んじて之に私淑するだけの趣味を有して居たのであるから、其名は當然文壇に逸すべからざるものであらう。

### 隣は萩生惣右衛門

風流の邪魔もの 其角の「梅が香や隣は萩生惣右衛門」の句には色々の解がある。其角と徂徠が偶々隣り合つた

ので、神仙の逢會であるなど解する者もある。梅が香を萩生に配したるは徂徠を尊敬したのだといふものもあるが併し恐らくは何れも非であらう。其角の爲人は徂徠に屈服するやうな人物でない、隣家に理窟ばかり言へる村學究の居つたのを、恐らく目障りとし、梅が香はよいが、隣りには風流の邪魔物があると、暗に徂徠を攻撃した句と見る方が、寧ろ其角の意をよく付度したものであらう。

日本人と花の暗香 其角の句に關係したことは無いけれども、梅の香を暗香浮動など言ふが、梅ばかりでなく日本人が花の香を愛するのは、皆な暗香を愛するのだ。其の奥ゆかしき香を愛するのである。此點も大に西洋人と趣きを異にして居る。

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

父母の十恩

孝を説く事儒教以上 佛教は父母の恩を細かに教へて居るものは、恐らく他に無いであらう。此の點に於ては、孝を立教の大本とする儒教よりも遙かに上である。其の所謂十恩なるものを見るに、父母恩重經に、人生れて世に在るは父母を親とす、父にあらざれば生れず、母にあらざれば養はれずと、先づ大體の恩を説き、更らに十恩を説いて居る。

程の苦みを受けられた恩、三は生子忘憂の恩とて子を生んで憂を忘れ、諸々の憂も子のためには暫し忘れられた恩、四は嘔苦吐甘の恩とて、苦きものを食ひ甘きを食みて子に與へられた恩、五は回乾就濕の恩とて、之れは父母の子をいつくしみたまふの恩をあらはしたので、子は乾きたる所へ廻はして己れは濕はひたる所に安じたまふ大恩、六は乳哺養育の恩とて乳を吞まし育し、みられた恩、七は洗濯不淨の恩とて、屎尿の掃除から膿血の世話まで一々不淨を洗ひ濯ぎたまふ恩、八は爲造煎業の恩とて、子を思ふがために惡業をつくりたまふ其の愛の深きこと譬ふべきものなき恩、九は遠行憶念の恩とて、子が親の心を知らず遠きに遊びまはりて歸らぬ毎に父母は非常に心配したまふ其の恩、十は究竟憐愍の恩で、何事につけても父母は其子をあはれみいつ

くしみたまふと、ある人の歌に「世を教ふみよの佛の心にも似たるは親の心なりけり」以上を父母の十恩といふのである。
大文豪の争も及ばず 若し學術的に言はざ、或ひは父母の恩を一二言にして蔽ふの語があるであらう。去りながら、俗衆をして細かに其の恩を知らしめるためには、列擧法に據るの外は無いのである。以上十恩のごときは、何れも父母の至情を擧げたもので、尤も周囲なる世界第一の文學者の筆と儼ひ來ることも、恐らく之れ以上を言ふことは、六かしいであらうと思ふ。

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

順境に處する難し

▲乱世の英雄羨む可きか 逆境や乱世に處するの難きは誰れも言ふが、順境や治世に立つの難きことは、誰れも知らぬ。乱世や變化の多き世の中に巧名手柄をしたのを誰れも羨ましがり、太平無事の天下に巧名手柄は立てがたし、あはれ乱世になれかし、變化多き然かも危険少からざる世の中に廻り逢ひたしなど云ふのは、其の實順境に處するの難事を自認するのであるけれども、夫子自から之れを知らぬ人が多し。別して壯年客氣の者には徒らに逆境に處して名を立てた人の行爲に傲はんとし、時勢の大に全じからざる今日に、之れを當て嵌めやうとする。惑へる哉と言はねばならぬ。

功を全じうせんとするは、尚更ら容易の事ではない。余は寧ろ前者の易くして後者の難きを斷言せんとする者である。夫れ難と雖も、乱世に非ざる以上は、治世に處して功名を立つる法を講せなければならぬ。逆境にあらざる人には順境に在つて名を成し功を奏するの道を教へなければならぬ。然かも實際は何うであるかと云ふに、世人は只一概に逆境や乱世に處したる人物を高く俾しとして喋々其の功績を擧げ、彼れは孝なり何んとなれば彼の家は貧なれば也、彼の婦は貞なり何んとなれば夫病めども深切なれば也、彼れは忠なり君暴なりと雖も背かざれば也と何れも逆し處し變に應じたる場合を擧げて云々する。而して所謂教育者なるものも、又其の響に倣うて日々教ゆる所の事柄は、皆此の逆なり變なる場合を云々するのである。

▲教育方針を一變せよ 而して教科書とそのものも皆此の記録に外ならずして、治世に處するの道順境に立つの法に至つては、殆んど説く所なしと言ふも誣言では無いのである。世を擧げて滔々之れに應じても、もとより當然のことである。嗚呼貧にして父母に仕へざれば孝ならざる乎。病者に厚く侍して始めて婦貞なる乎。何んぞ其の理あらんやである。たゞ變に處し逆に應ずれば其の行ひ顯はれ易く、順に處し常に應ずれば其の行ひ顯はれ難い。其の間もことより甲乙の差がある可きでない。余は教育家が早く此點に着眼して、教科書の如き、一概に逆境の事例に偏せず、順境に處する順道に、専ら力を致さんことを、希望して措かぬのである。

春城夜話

(四)

市嶋謙吉氏

美人論 (一)

スベンサーの美人論 如何なる之れを美人と云ふ。詳しく言へば如何なる之れを美男子と云ひ、如何なる之れを美婦人と云ふや。美とし醜とする標準は果して那邊にあるか。我々の美とする男女、人も之れを美とすることがある。又必ずしも然らざることがある。然らば即ち美醜の別は、人に依りて其の標準を異にするやうでもある。昔から此の標準を研究するもの少なくないが、未だ確説あるを聞かない、先年スベンサーの美人論を讀んだことがある。今は細かにも記憶して居らぬが、其の所説は智あり徳ある人の相貌は美である。例へば開明人は野蠻人に比し

其の相貌大に美なる同一一般である、といふやうな論法で、骨相學上から論を立て。標準を一に智徳に取つて居たかに記憶する。

古聖賢の相貌 若し此の説の如くれば多智の人、達徳の人には婦人誰れも惚れ込む可き理合ではあるが、實際は爾うばかりでもなく寧ろ相反することがある。彼の堯眉は八彩、舜目は重瞳、皋陶は鳥跡、文王は四乳、禹の耳は三漏、伏羲は龍鼻、孔子は反羽、老子は日角、古への聖人は頗る常人に異なる所がある。而して之れを聖賢の相として、直ちに美といふ可きかと言ふに、恐らくは考へものであらう。

印度に於ける美の標準で、實は智徳に取つたる標準なること、佛經の衆善功徳の所得を表はす也とあるに依つても知られる。但し印度に於ける美の標準は必ずしも三十二に限るにあらず、般若經には六十種好とあり、華嚴經には九十二相を擧げてある。其の數に於ては差があれば、善徳の致す所と言ふに至つては即ち一である。又同じく三十二相といふ内にも、見立て方必ずしも同じからざるあり。試みに阿毘の三十二相を列挙せう。

Table with 2 columns of 32 items each, listing various physical features like '足下平滿', '手足細軟', '伊尼塵瑞', etc.

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

美人論 (二)

釋迦は果して美男子か。これ所謂印度に於ける美相で、功徳の致す所だと云ふから、最功徳者最賢者たる釋迦は勿論此の相を備へて居らねばならぬ筈である。佛敎徒は曰ふ、釋迦は此の三十二相を備へたり、釋迦は洵に印度第一の美男子なり、と。如何さま釋迦は印度の貴族だから、元來美男子でもあつたであらう、況て善徳も備はり、修業も積みたる上は、尙更ら美相が備はつて居たことであらう。併しながら疑ひを其間に挿む者もないでは無い。明儒の如き即ち是である。曰く、故夷朴陋の貌華人をして敬信せしめんが爲の白さを云ふ三黒とは眸子、睫毛、眉

歸省 (一)

(幼時の回顧)

鷗日外港の市嶋氏を旅宿に訪ひて其の歸省の回想を聞いた。春城夜話の

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

毛の黒きを云ふ、三紅とは唇、頬、爪の紅きを云ふ三犬とは額、兩眉の間、口の廣く且つ大なるを云ふ、三小とは口、鼻、顎の小ささを云ふ、三長とは頭髮、手、身体の長さを云ふ、三短とは耳、足、齒の短さを云ふ、三細とは指、唇、頭髮の細さを云ふ、三狭とは眼、脚、目の細く狭さを云ふ。之れ歐洲に云ふ處であるが、日本に於ても概ね同一で、唯だ東西の風俗同じからざる一二、好尚を異にするのみである。

一節として抄に挿入する(記者)

故郷思ひがたし。故郷思ひ難しの古語の通り、誰人も故郷に遊びては種々なる意味に於て、非常に愉快な感じに打たれるものである。殊に久しく離れて居て、たまさかに歸省する時などは、別して回顧の念を催はすのである。自分も常に郷里に歸る度毎に、土地の父老に會して思はず夜を更かし、幼時の事などを想起して、感慨に堪へぬ次第であるが、此度も母方の西條の丹吳氏の草庵に北堂を訪ひ、兒と共に一泊して、轉々感動に堪へざるものがあつた。西條は第一の故園。此の西條は母方の家の在る所なるのみならず、戊辰の役に自分の故郷の水原が、丁度戦争地になるもいふやうりことで、曾祖母と亂を此の地に遭り、一年餘も此の丹吳家に居たことがある。此の頃自分は十歳位で、毎日上山印の處へ通つては、

春城夜話

(市嶋謙吉氏)

總大將の捕虜 最初曾祖母に従つて此の村に來た頃は、まだ脱臼の時代で

所謂寺子屋式の手習を教はつて居た。それから一旦郷里へ歸つて、又二三年過ぎてかゝ全家擧つて西條へ移轉することになつたが、此頃はいくらか學問も進んで居たので、毎日西條より一里餘を隔つた築地、肥田野竹塙先生の所に通學して、勉強し、書を讀み詩を作ること、かゝり上達した。斯様の關係がある故、西條は自分に取つては第二の故園と言はんよりは、寧ろ第一の故園とも云可き重大の關係がある。自分が漢學教育を受けた地は此處で、今日あるを得た基礎は、此の西條に於て築くを得たとも云を得たのである。且つ自分は幼少時代から家を離れて外にのみ居つたが、幾許か物心がついてからは、此の西條に居たので、是等の點から考へると、益々以て第二の故園といふよりも第一の故園と云ふ方が適切だと思ふのである。

春城夜話

(兎)

(市嶋謙吉氏)

△觀音像の男性女性(三)

▲印度のターラー 我國に於ける觀音の像は、大抵女性として表顯せられてゐる。我れは男性として表顯された觀音は殆んど見たことがないが、印度に於ける觀音の像は悉く男性であるさうで、觀音の女性であるのを別にターラーと稱してゐる。外邦の觀音は、恐らく此のターラーを寫したものであらうといふことである。

△島原の婦人ご手紙

▲九州の嶋原越後の寺泊 長崎縣の嶋原にては、婦人にして手紙の書きざるものが少ないとこのことを聞いて、婦人教育の盛んなのに、感服して居つた處が、細かに其の事情を聞いて見ると、

此地は婦人の海外に醜業稼ぎに出るもの多く、手紙は本國との通信の必要上特に致へ込むものであるさうだ。越後の寺泊も同様の趣きがある、而かも同一の理由に依るさうである。

### △禪學書中の興話

△禪學書中の興話  
禪學の書物には、往々面白いことが書いてある。次の話なども、其の一つだ。  
昔、曹洞宗の一大學匠で、萬山、徳翁の二僧が、備中へ行く途中、雨後のこの二僧が、水嵩みなぎり居る川端に、年若の美女がたゆたふて居るから、徳翁之れを憐れみて、其の美女を負ひ、川を渡つた。處が萬山之れを見て、大喜ばず、徳翁の行爲を破戒なりとて、大に戒めやうとしたが、徳翁答へて、我に負ふ所の美女をわろしてより、時既に久しきも、たまへは尚ほあの美女を背負ひ居るかに、逆さに言ひ詰つたさ

うだ。即ち自分は美女を負ふたけれども、其の事は忘れてゐる。た前はまた其の事を考へてゐるのか、と責めたのである。徳翁の禪機は、なかく味いがある。

### △有用之者不可入

△有用之者不可入  
無用の者入る可らずとある代りに、「有用之者入る可からず」と、別荘の前に札を打つた人がある。庵室の前に、「醒客庵門に入るを許さず」と標榜したので同一の談である。又嵐山には一枝を折らば一樹を植ゆ可しといふ制札がある。天祿紅葉の例に任せ、一枝所取る輩は一枝を研べしとある。辨慶自筆の櫻の制札に比し、殺伐の氣なきが優るのみならず、暗に植林の要を寓したのも妙である。

## 春城夜話

(市鳩謙吉氏)

### △契沖の圓珠庵 (上)

契沖遺跡を訪ふ 去る三十六年の一月、關西へ旅行した時に、契沖阿闍梨の遺跡圓珠庵が、今尚ほ舊態を改めず天王寺附近にあると誰れかよら聞いて急にそれを見たいと思ひ立つて、天王寺へ車を走らせた。諸方尋ねて漸く尋ね當つた處は高津御差町で、眞田山の西南に當り、坂の降り口のやうな處に契沖の遺跡を刻した石が立つて居つたので氣がつき、車を下りて寺門を潜つて進入つて見ると、如何にも小さいな茅葺きの家がある。構造は頗る粗なものであるけれども、近年手入れをしたと覺しく、新しい柱や板を以て、あちらこちらを補つた跡があつて、額縁はしてをらぬ代りに、二百年の星霜を

経たぬものと思へない。唯だ中に這入つてよく見るに、天井の桷や鴨居などが、煤に染みて頗る古材に見られるのは、恐らく契沖時代の木材であらうか。何分老婆が一人留守居をしてをるばかりで、何を聞いてもわからないのは當惑した。

契沖の書齋と墓 幸ひに來合はせた男が、此の坂を下りて一町ほど行けば和田某といふ家がある。契沖阿闍梨の書いたものも、其の家にあるといふから、其處を尋ねることにした。此の庵を去るに臨んで、墓はいづれ、書齋は何處にあると尋ねれば、其の庵の後ろにあるといふから、左手へ廻つて見た處、庭の入り口に小さな門があつて、庭の一隅に四疊半の茶室がある。契沖が書を著はした書齋の今尚ほ存して居るといふのは、確かにこれであらうが一見新營のすき屋のやうで、書齋とも

思はれない。たゞ此處は高地で、一方は快濶に開けて居り、眺望も極めて佳いから、書齋などを設けるには、屈竟の場所だと思はれた。扱て又阿闍梨の墓は、庭の他の一隅に在つて、思つたより立派なものである。其の傍らに新しく大きな卒塔婆のあるのは、先年阿闍梨二百年忌に立てられたものと思はれる。参詣者が絶えずあつて、新しい花など多く手向けられてあつて

庵の寂寥にも似ざる心地がする。余も此の文豪に負ふ所少からねば、一拜して感謝の意を致しつゝ、庵を去つて和田某氏の居を訪ふた。

## 春城夜話

(市鳩謙吉氏)

### △契沖の圓珠庵 (二)

圓珠庵の由來 扱て和田氏の居室を

訪ふて、來意を告げた處、主人の出で言ふには、生憎住持が重患に罹つて居て、今直ちに阿闍梨の遺物を貴覽に供すること難し、若し重ねて來り給はば、住持も輕快に赴くべければ、喜んで貴覽に供せんといふ。余は此の人について、庵の由來を聞くに、曰く、阿闍梨初め泉州池田村に庵を構へて國學を修め、後布施屋と大坂に移るや、布施屋は阿闍梨のために、泉州にある庵を其處に移した。今の庵即ち之であるが、木材の若干古きを存するのみで、建築は其後改めた。又彼の四疊半も無論兩三年に作る處で、舊時のものではないが、舊と書齋のあつた位地は此處である。書齋は二階造りで、極めて狭隘のものであつたが、三十二年の頃暴風のために倒されて、已むなく今の四疊半を作るに至つたのである。阿闍梨の遺墨 阿闍梨の遺墨について



ては、主人の語る處に依れば、斷篇零墨などの類ではなくて、中々多くの遺稿が、立派に保存せられ、彼の代匠記の草稿のことも、嚴重に保存せられてあるといふ。併し後に聞く所に依れば、此の遺稿は阿闍梨の眞筆であるか何うか、疑はしい點もあるさうだ。何れにしても寺僧病んで之れを見ることの出来なかつたのは遺憾であつた。(此項並)

### △菱川師宣の刺繡

意外の發見 菱川師宣はもと刺繡師であつたさうで、其の繡したものが、今五十嵐敏士氏の家にあるさうだ。そんなものかと思つて見ると、絹に獅子を繡つたもので、奉納額である。それを故に年號と保田村菱川吉左衛門と、これに絹糸で繡うてあるさうだ。そんな額を何處へ獻じたかと思つて見ると、更らに意外であつたのは、房州の安田

勳氏の宮にあつたのだといふことである。安田の家は房州では有名な法印であるさうだ。

### △小説家と支那小説

紅葉山人の用意 紅葉山人の生前に之れから手當り次第支那小説を博く涉獵するつもりだと言つたことがある。怪談の多い支那小説などよりも、寧ろ西洋小説を讀んでこそ利益あらんと余が言へば、紅葉曰く、何分漢字交じりの文章を用ゆる今日の境遇にては、支那小説を讀んで、文章のアヤを頭に入れて置かなければ困る。物の形容などには、たとへ漢文を用ひ能はざる迄にも、讀んで置くと和文も自から簡潔で、委曲を盡すことが出来る。之れも一説である。

### 春城夜話

(市嶋謙吉氏)

△寒山寺 (一)  
寒山寺は、楓橋夜泊の詩を以て有名な處で、日本中如何なる人でも其の名を知らぬものはない。そして其名を聞くものは、何れも寒山寺とは如何なる處かと聯想するやうである。諸家の隨筆などには、特に此の事を調べてあるやうだ。先年鳥居龍藏君が、苗族探検の折、全寺を訪ふたことがあるが、其時の模様を記したものが、手許にあるから、先づ其大要を語らう。此の記事が、寒山寺の眞況を最もよく描いてゐると思ふ故である。

△寒山寺の今昔 鳥居君の記事に依

ると、寒山寺の位置は郊原にあるが、寺のある處は少しく高くなつてゐる。前は一小河で、この河は彼の楓橋の方に流れてゐる。全寺は其の四圍全く草を以て埋められて居つて、廟宇は只シヨソボリ、其草深き中間にある。殿堂はあまり大きくない。壁は破れ、軒傾き、屋根に覆へる瓦はいくつも無くなつてゐる處があつて、其のひまには、省が誰れ憚らず、己が家として、巢を作つてゐるといふのは有様である。之れでも昔は、中々廟宇の規模廣大であつて、虎阜に相對し、楓江に相接し大殿、鐘樓、講堂、方丈など巖然として屹立し、かの梁武帝の如きも、當時に至つて、經を講じたことがあつたのである。殊に唐代に至つては、最も盛んであつたものと見ゆる。そはかの佛前勳の盛んなる「夜半鐘聲到客船」の詩を味つても知るこゝが出来やう。

依然たる詩的光景 物變り星移り、世は唐宋を經、屢々回祿の災にかかり度び、重修もしたが、又もや道光廢の兵燹に遭ひ、悉く荒丘と變じてしまつたが、或る増越があつて、この名地を空しく草間に捨て置くに忍びずとて、遂に喜捨を募り、出來あがつたので、今日の寒山寺である。寒山寺は昔のおもかげ一もなければ、其地が既に靈域にして山水の勝に富み、加之楓橋夜泊の詩で名高いから、案外にも其の價値を落さない。たゞに價値を落さないのみならず、其の堂宇のさびしげに獨り叢中に立つてゐる有様は、實に詩的光景として、ながめられるのである。

△寺門と佛殿 門には「寒山寺」の額をかけてある。此の門を這入ると直ちに方丈である。佛殿はあまり大きくなく正面に佛殿を安置してある。其の佛体

### 春城夜話

(市嶋謙吉氏)

△寒山寺 (二)  
寒山寺の庭に鐘 寒山寺の庭は、あまり廣くもなく、見處はないが、草中たゞ昔し盛んであつた時の廟宇の石礎が、其の餘情を永遠に横たはらしめてゐる。が、なつかしく眺められる。かの楓紅の客船の夢を驚かした鐘は、今はない。寺僧其他の人は、かの詩をして、永く空しくせざらしめなためにとて、新たに鐘を作つて寺内に掛け置んだ。鐘が起り、其の聲最中であつた。△楓橋と鐘聲 寒山寺を去つて、小河に沿ふて行くこと數町にして、田舎の小市街に出る。此處には目鏡橋がか

よつてある。この目録橋が即ち彼の詩に名高い楓橋である。其の橋下、船をつないでをつた客船が、夜半寒山寺の鐘聲を聞いたものと見ゆる。さらぬだに鐘聲は、遠くても聞ゆるものであるのに、殊にかくの如く接近してゐる所では、無論耳元に響き渡つて、客船の夢を破つたのは明かに想像される。

▲楓橋附近の光景 今の橋は新しいもので、材料は石より成つてゐる。兩岸の橋側には、廟宇人家があつて、橋下には數艘の小船がつかれてゐる。上流の方より蘇州に流れ来る筏船や又白帆かけたる船が往來してゐるのが見える。此の附近は廣い郊原で、後ろの方には淡墨で畫いたやうな山が、かすかに望まれてゐる。この邊實に絶景である。

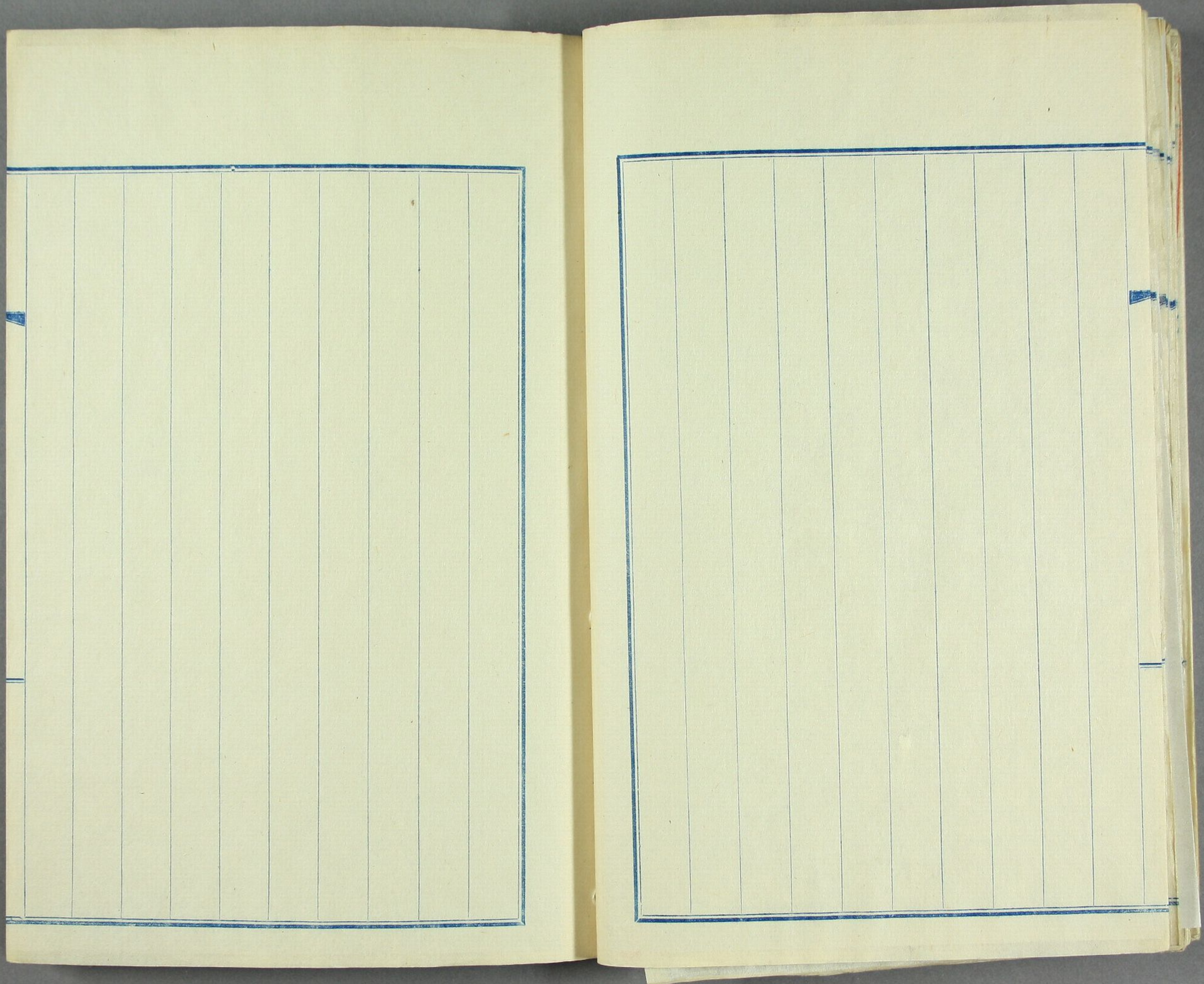
▲楓橋夜泊の碑に宿縁 以上は鳥居君の記事に依つたものであるが、鳥居君のみならず、日本人にして支那に遊ぶ

ものは、必ず此の寒山寺を訪て行く。寒山寺の附近には、楓橋夜泊の詩が碑に刻まれて建つてゐるが、其の詩は草書で書いたものである。日本人が行くと、必ず之れをふツかいて持て歸る。近來此の碑を搦つたのを持て歸るのを見るに、殆んど光膚なしと云つてもよい位である。士人の如きは、何か日本人が、此の碑に宿縁でもあるかの如くに思ふて、驚いてゐる近郊は柵を結ぶて、碑の側へは近づけぬことにしたさうだ。

▲山田寒山の計畫 山田寒山は暫らく此處に居て、歸來大に寒山寺について氣燈を吐いてゐる。實は一晚、野宿をした位のものであらうが、風流といふものは妙なもので、世間では此の法燈を眞に受けたいと、寒山も大にわらくよつた。その寒山和尙。近頃益々熱が高くなつて來て、寒山寺の鐘の再建を

計畫した。その準備として、先づ鐘の分身幾千を作り、之れより得た金を以て、本當の鐘を建てる筈である。金を募ることも、こんな風に風流にやれば罪がなくてよからう。

此處の山田寒山



以下全て  
白紙

